

催眠宗教論

古屋鐵石著

東京
博士書院

260
316

013586-000-5

特18-912

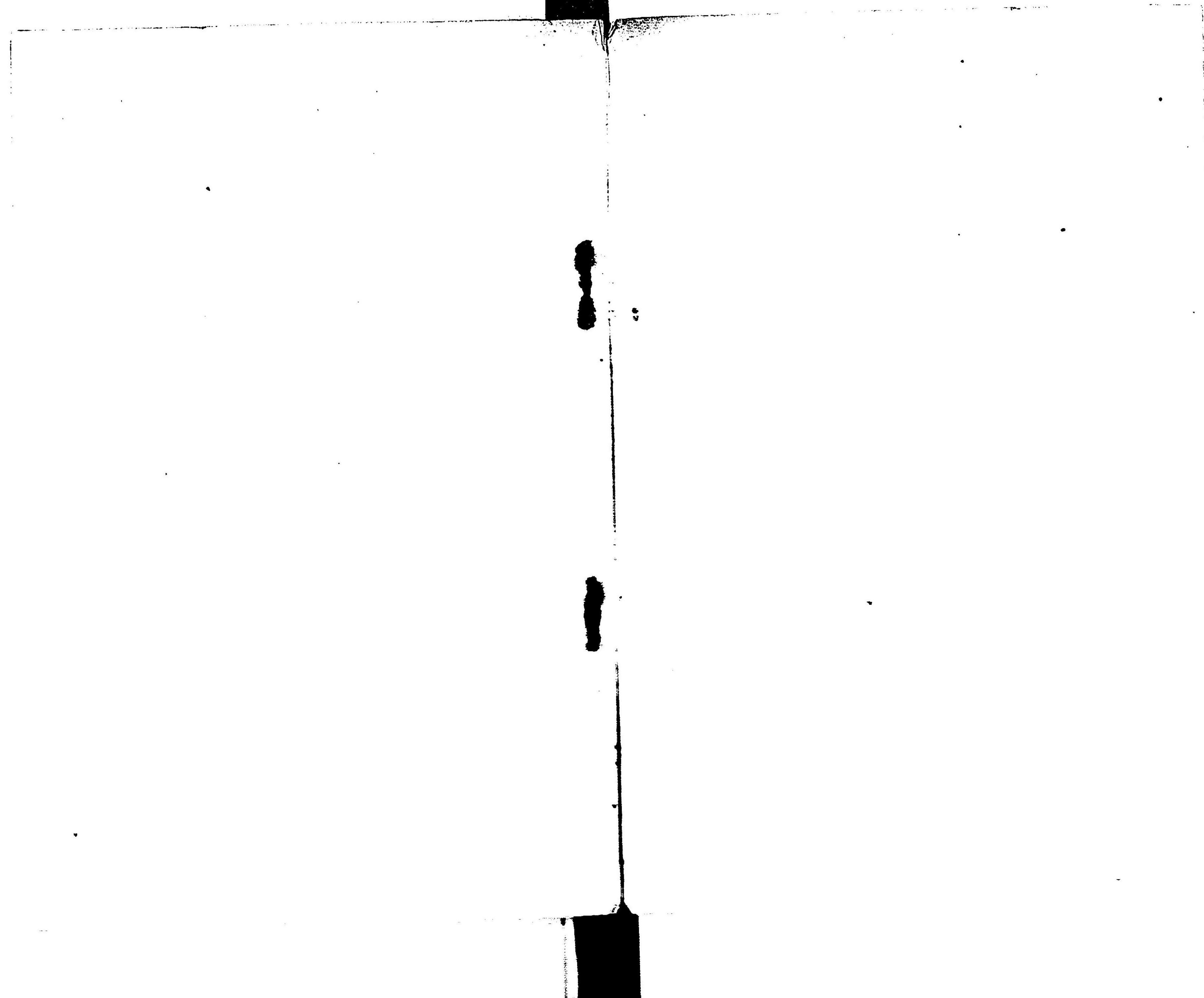
催眠宗教論 一名、宗教改革論

古屋 鐵石(景晴)/著

M42

ABA-0054





持18
9/2

古屋鐵石著

催眠宗教論

東京 博士書院





ソリオイバめしせ眠籠を者るざら知なソリオイバ
りけ弾く甘に實にるためしつ弾をL友戦7せた持を

自序

自

著者は曩に某所に於て宗教大意を講述したることあり。又或所に於て催眠術と宗教との交叉點を講演したることあり。其二者を筆記せるもの即ち本書なり。本書第一編の催眠論は催眠術と宗教との交叉點を述べたる者にして、催眠術上の現象を宗教上の學理を以て説明し得る點、宗教上の現象を催眠術の學理を以て説明し得る點を擧げ、宗教と催眠術とは或意味に於て目的手段及び効果を殆んど同ふすとの多くの宗教家の説を掲げり。第二編は宗教大意にして宗教の定義、起源、種類及び發達の有様より論じ起して、宗教と哲學、科學、倫理、教育の關係、佛基兩教の如何を述べ、最後に理想の宗教を擧げ、邪教を

序

信ずべからざることを論ぜり。
偶々著者多忙にて筆記を校訂するの暇なく校正も皆人に委せり、之れに由りて字句の誤謬體裁の不備は甘受する所なり。學者本書を一讀せられ、所説の如何は扱て置き、今の今迄雲烟過眼に附せし催眠術は、其實驚くべき程吾人の動作に關係深き以所を悟るの端緒ともならば、著者の望みは足ると共に讀者は至大の幸福ならむと云爾。

明治四拾貳年七月下旬

古屋鐵石識

催眠宗教論（一名宗教改革論）

目次

第一編 催眠論

第一章 緒言……………一

物質的時代 ● 精神的時代 ● 宗教は情か知か信か

第二章 催眠術とは何ぞや……………三

重病者即治例 ● 不敬者矯正例 ● 煩悶者救濟例 ● 錯覺幻覺

及び天眼通 ● 心身相關と聯想作用

第三章 宗教上より見たる催眠の原理……………七

催眠の原理(心理説、精神靈動説、折衷説) ● 宇宙の大精神 ● 不動の精神 ● 大我と催眠状態 ● 大覺解脫と催眠状態 ● 座禪

と自己催眠●観法と自己催眠の幻覺●人格變換と佛教
●精神力によりて無機物を左右す●催眠應用の布教

第四章 宗教上の奇蹟と催眠術の現象……………二八

宗教上の奇蹟とは何ぞや●三界唯一心と催眠状態●雲照
律師の催眠術と佛教の奇蹟論●六神通力天眼天耳神足力
宿命他心漏盡と催眠術

第五章 神佛の靈驗と催眠術療法……………三六

神佛の靈驗とは何ぞ●催眠術と降神術●信仰と精神療法
●催眠術的療法を主とせる宗教

第六章 催眠術と宗教との交叉點……………四四

催眠と宗教とは目的を同ふす●手段を同ふす●範圍を同
ふす●効果は催眠の方大也●催眠術は一種の宗教也●學
者の論争

第二編 宗教論

第七章 宗教とは何ぞや……………五二

第一節 宗教の定義……………五二

諸大家の定義●著者の定義●知神と信賴●安心立命

第二節 宗教の心理的起源……………五五

無常觀と弱小觀●神人合一の努力●彼此神の分身

第三節 宗教の歴史的起源……………五八

祖先崇拜(動物崇拜、木石崇拜、天然崇拜)●庶物崇拜(說拜
物教、拜靈教、遺物崇拜、護符崇拜)●トテム崇拜(說動物崇
拜、天然崇拜、靈魂崇拜)

第四節 宗教の種類……………六八

天然崇拜教●靈魂崇拜教●祖先崇拜教●庶物崇拜教●

トテム崇拜教(劣等人文教) 高等人文教 ● 神話的宗教(多神教)
● 單一神教(交替神教) 唯一神教 ● 律法的宗教 ● 倫理的宗教

四

第五節 宗教の發達

宗教意識發展の四階段(己の爲に己を愛す、己の爲に神を愛す、神の爲に神を愛す、神の爲に己を愛す) ● 自我放棄 ● 我があるは天功を輔けんが爲なり

七八

第六節 宗教と迷信

知的判断の誤謬 ● 迷信は宗教の病的状態 ● 迷信とは不合理なる宗教的信仰 ● 宗教の本領 ● 神の直覺 ● 不可思議超批判の事象

八三

第八章

宗教と學術

八三

第一節 宗教と哲學

哲學と宗教とは目的起源及び心理を一にす ● 主能を異

にす(抽象的理論的と具體的徹號的) ● 目的上の差(他力的 壓迫的社會的と自力的個人的批評的) ● 影響と勢力との 差(一部の階級的と普遍的平等的) 日常生活上に力を及ぼす(と否と)

八六

第二節 宗教と科學

科學と宗教との衝突點 ● 科學の爲に宗教を進めし點 ● 感情と智性との別 ● 信仰と認識との別 ● 宗教の境地と 科學の境地 ● 人心を支配し得ると否との差

九三

第三節 宗教と倫理

目的起源の一致 ● 自力精進と他力依馮 ● 範圍の異同 ● 倫理に反せる宗教あるか ● 倫理とは何ぞ

九九

第四節 宗教と教育

教育の目的 ● 宗教を重ぜざる教育の弊 ● 國民教育と宗

五

第九章 成立宗教

教との關係 ● 教育上に特種の宗教を信ぜしむるの可否

第一節 佛教

小乗と大乘との意義消極的退守的偏執的と積極的進歩的達觀的解深密教の所説人我空我法皆空非有非空中道妙理 ● 權大乘と實乘との意義(五時の範疇華嚴時阿含時方業時般若時法華涅槃時) ● 顯密の意義(豎横の二範疇十住心の判顯密二教の判法身) ● 教禪の意義教外別傳不立文字直指人心見性成佛 ● 頓漸の意義難行道と易行道聖道門と淨土門

第二節 基督教

基督の本旨 ● ホール神學の要旨 ● 三位一體説 ● 神人説 ● 原罪及び神恩説 ● 原始基督教所説の概観

第三節 佛基二教の異同

佛耶二教一致の點(世界的倫理的自律的) ● 相異の點(理智と感情靜的と動的絶對的平等觀と相對的平等觀狂熱過激と冷灰枯淡他力的と自力的精進解脱と信賴救濟)

第四節 理想の宗教

倫理的 ● 合理的 ● 社會的 ● 宗教の效果 ● 邪教とは何ぞ ● 宗教の大革命

催眠宗教論目次終

本書の第二編「宗教論」は松本天籟氏の助力によりて成る、爰に此事を記して氏の效勞を感謝す。

催眠宗教論

古屋鐵石 著

第一編
第一章

催眠論

緒言

言 緒

近代科學の進歩は實に其の隆盛を極め物質的文明は其極度に達せり而して今や昔時の不可思議は可思議となり過去の不可能は凡て可能となれり大いなるかな科學の力偉なるかな物質文明の勢其向ふ所滔々として哲學も宗教も倫理も教育も凡て其の光りを失ひ一齊に其冠を脱ぎ捨て、膝行匍首行きて以て仕へんとす。斯くて萬人は悉く科學に謳歌し物質文明に心酔して又他あるを知らざるに至れり、されど人は遂に長く一局に止まること能はず暫くにして其の首を上げ、醉眼を開いて周圍を見たり同時に科學の缺陷と物質文明の惡弊との歴々として眼前に

迫り來たるを發見せり、則ち吾人は先きに其光り能く天地人の一切を照破すべしと信じたる科學の實は僅かに其が一角の皮相を照すのみに止まりて、其の根本に對する疑ひに至りては、益々此れを深からしめ、又曾ては其力能く充分に吾人の幸福を増進せしむるに足ると思はれたる物質文明の誠は唯人類社會の表面を僅かに修飾するに止まりて、寧ろ却て吾等に一層の苦痛と不安と、困難と疲勞とを與へしに過ぎざることを發見せり、茲に於て乎、漸く科學と物質文明とに嫌焉たる者は、去つて哲學に行き、或は宗教に走り以て倦怠せる心靈の麴麩を求むるに至れり、斯くて哲學は再び顧みられ、宗教又復活の新氣運に向へり。

哲學に就きて今は暫く言はず、我國に於て宗教が識者間に大なる注意と尊敬とを以て研究せらるゝに至りしは、近々數年以來のことなり、而して今日に至るも猶未だ充分に考究を遂げられたりとは言ふ能はず、從つて此れに對する意見も又人によりて一樣ならず、或は情を主とするものあり、或は知に重きを置くものあり、或は信に偏するものあり、或は理に傾くものあり、而して其の當を得たるものは極めて稀れなり、此の時に當つて催眠術なるものが、嶄然頭角を現はし思想界に大影響を

與へたり、催眠術は惡癖及び病氣を治し得るのみならず、從來宗教上の奇蹟と稱したる現象をも起すを得、精神の修養として偉大なる效果あり、精神作用の巧妙なることを立證する唯一の方法なり、催眠術が近年學者間に唱道せらるゝ、偶然にあらざるなり、爰に於て余は宗教と催眠術とを比較研究して見るに、大に交叉したることありて頗る面白し、以下順を追ふて之を見んとす。

第二章 催眠術とは何ぞや

催眠術とは如何なるものなるか、之を解し易からしめんが爲めに、催眠術を行ふ有様を左に述べん。

第一例腰の立たぬ重病者が坐し居る前に催眠術者立ち、吾汝の病を根治せむと云ひつゝ、術者が懷中より軍扇形の催眠具を出して、病者の患部を撫するや、忽然病者は立ち上りて歩行し、健全體のものに異らず、之れ催眠感性の強き者に治療の暗示を感應せしめたるなり。

第二例常に神佛に對して不敬の言語舉動をなす不心得者あり、其者が催眠術者の

室に入るや否や、術者エイと一聲氣合をかけたれば、其者の手足不随となり、俗に云ふ不動の金縛りの状態となれり。術者暗示して曰く、爾後汝は神佛を大に尊敬するやふになつた。汝の前にエスキリスト御出遊ばす。との語終るや否や、催眠者は謹んで再拜又九拜す。覺醒の後には尙一増敬神の念高くなる。目を覺したる後神に對して身の罪を懺悔し祈禱を捧ぐ。と云へば催眠者は全くその言はれし通りに覺醒後神に對して罪を懺悔し祈禱を捧げ、爾後非常の信者と成れり。之れ普通に行ふ催眠應用の矯癖にして、覺醒後直に罪を懺悔し祈禱を捧げしは、殘續暗示の感應なり。

第三例非常の神經質にてさもなきことを苦に病みて胸中には常に苦勞の種消へたることなき不幸の男あり、仕事をなすにも精神が仕事の事にみに集注すること能はず月を見るも、花を眺むるも憂ひの種となるを悲しき、其不幸の男を椅子に凭らしめ催眠術者が光る球を手に持ち之れを見詰めて居なさい。目を閉ぢて眠る。君は樂觀の人となつた。君の耳に聽へ目に見へ口に味ひ手に觸るゝもの一として樂しからざる者はなひ。嗚呼愉快なり。君程幸福の者なし。君の幸福は萬

人の羨む所。と暗示したれば、催眠者の満面に喜色溢れ、手の舞ひ足の踏むところを失するの有様あり。覺醒の後には全く別人の如き愉快なる磊落なる快活なる御世辭上手の人となり、交際の花未來の神と尊ばるゝに至れり。此れ即ち催眠術治療なり。

第四例被術者を寢臺に横臥せしめ、術者傍に立ちて右手に刀印を結び、目を閉ざし、しめ刀印にて被術者の面上に於て字を書き如きことをなすや、被術者は睡遊状態となる。術者曰く、茲に美人立teri見ゆるや、被術者曰く、見ゆ(實際は美人立ち居らず故に幻覺なり)術者マツチの箱を與へ、之れは饅頭なり食せよ。被術者マツチの箱を饅頭の味にて食ひ終れり。之れは錯覺なり。術者曰く、汝之より上野の公園に行き梅川樓に上り、樓内の様子を見て御出で、被術者上野に行く姿勢をなし、梅川樓に上り室を見廻る有様をなす。術者曰く、今二階には藝妓居るや、被術者曰く、二組み居る。一組は今太鼓三味線にて踊りの最中、一組は客と密々酒を飲み居る。と依て電話にて梅川樓へ問合せたれば、全く其通りなり。之れは天眼通の實驗なり。被術者は催眠より覺めたる後催眠中のことは何事も知らざりし。

以上四例の實驗談を見て、讀者の中には、催眠術にては今少し不思議なる驚くべき現象を呈すると思ひたるに、豈計らんや前記四例の如き敢て奇とするに足らずと思はるゝ者もあらむ、然れども余は事更に奇妙のこゝをのみ示すを以て我事終れりとなす者にあらず、唯催眠術の如何なる者なるかを具體的に述べたるに過ぎず、然れども簡易に一週間や二週間の間に學び得る前記の催眠現象が、宗教上に如何なる關係あるか、大に研究を要する所なり。

翻つて催眠術とは如何なる者なるかを主觀的に見れば、催眠術は被術者を催眠状態と云ふ無念無想即ち自分考への起きざる状態となし置き、術者は暗示と云ふて術者の考へを被術者の考とならしむ、換言すれば術者の云ふ通りに觀念せしめ、確く觀念して動かざれば觀念通りに肉體及び筋肉は働いて其觀念通りとなるなり、一言に云へば生理上より見れば心身相關にして、心理上より見れば聯想作用なり、催眠の原理方式等に就ては拙著催眠術教科書に詳なるを以て之を爰に贅せず、以下各章に述べたる催眠術と宗教の關係に就ては、勉めて自説を去り、大家の説を順に列擧して、學者研究の資に供せむとせり、余が自説を勉めて述べざるは、宗教に對

する敬意の缺けんことを氣支ひたると、思想上に於ける大問題を輕視すべからざるを深く思へばなり。

第三章 宗教上より見たる催眠の原理

催眠の原理如何に就ては種々の説あり、各自己れの抱ける説を是とし、他の説を排すること、犬猿も管ならざる有様なり、我國に於て行はるゝ説を大別して二とす、一は心理説にして、他は精神靈動説なり、其説を詳説すれば、優に一大冊子をなす故に、其要を一言するに止めん。
心理説にては、催眠の原理は主として豫期の作用、注意の凝集、暗示の感應にありとす、豫期の作用とは術者に術を受くれば、自分は必ず催眠すと確信して、術を受くる故、其確信通りの結果を得るなり、注意の凝集とは、被術者の注意を或一點に集めしめ、光輝の球を見詰むるとか、身體の或る部を撫擦するとかして、其處に注意せしめ、聯想作用を防ぎ居ると終には、全く其注意し居ることをも忘れて、無念無想即ち催眠状態となるなり、暗示の感應とは、術者が被術者に向つて、今術を施して汝を催眠

せしむ最早眠くなつた手足重くなれり其手を如何にしても動かすことを得ずと云へば其通りとなる之れ即ち暗示の感應なり。精神靈動説によれば術者の精神が被術者を催眠せしめんとして動かさること山の如く堅きこと石の如くなりて止まざれば術者の精神が術者の肉體を離れて被術者の精神と同化して被術者の肉體を左右すと云ふに歸着するもの、如し依之催眠の原理を心理上より見れば宗教上の學説に縁薄きも精神靈動説によれば催眠の原理及び現象は殆んど宗教上の所説と合致するもの、如し此二説中何れの説が是なるか余は折衷説を執るものなり其所以如何は大議論の存する所なるを以て唯爰には右三説あること丈を順序として一言述べ而して以下宗教上の現象と如何なる關係あるかを見んとす。

雜誌精神第七號に兒玉意誠と云ふ方が催眠の原理を精神靈動的に簡易に説明せり即ち其要點は下の如くなり抑々精神なる者は腦に宿れる者なることは少しも疑ひませぬけれども腦以外にあるものと思ひます然らば何所にあるかと申すに精神は宇宙に充滿し地上地下の別なく至らざる所なし之を宇宙の大精神と云ふ

此の大精神を指してキリスト教は神と云ひ佛教は佛と云ひ孔子は之れを天と云ひ我が國の神と云ふも此の宇宙の大精神に外ならぬと思ひます此宇宙の大精神は全知全能にして一度思念すれば萬事萬端ならざるなし故に西洋に於て造物主と云ふも此の宇宙大精神に外ならぬ事と思ひます又た日露の戦争に於きましても大將方の報告は皆な天佑の語を以てす此の天即ち宇宙の大精神であります然らば我々の靈魂即ち精神は宇宙の大精神の分子が腦中に宿れる者にして我々人類に於ても此の靈妙不可思議の精神を以て度せば成らざるの理あらず斯く申しましたならば或は云はん然らば何事も成し得べきか或は千里の遠きを見ることを得べきかと實に然り右等の如き萬事萬端ならざるは種々雜多の雜念混ざるが故なり即ち精神一到ならざるが故なり此雜念を排除することを得ば我々の精神も宇宙の精神に同化する者でありますから何事もならざるはなし又我々の精神は各個共通するものであります甲の精神乙に通じ乙の精神甲に通じます故に催眠術の效否は被術者の精神の使用如何に由るは勿論でありますが術者の精神如何によりて大に異なるものであります故に被術者には病の治癒すべき理由を説

明して得心せしめ、然る後催眠せしむるは雑念を去らしめ、病の治癒すべき一心に
 ならしむるの手段であり、又た術者も大に雑念を去らなければならず、若
 し施術中に雑念起らば、其效薄弱或は無効ならしむ、故に催眠術者の巧拙は人の信
 頼を受くること、及び雑念を去ると否とに由るのみ、此の雑念を去り術者の精神が
 宇宙の大精神に同化するに於ては、如何なる千里の遠きも我精神界に包含するに
 より、遠きに隔居する患者を療するに、なんぞ出来ざるの理あらむや、と思ひます云
 々

此説は哲學者或は宗教家が大に稱揚する所なるも、科學的に催眠術を研究しつゝ、
 ある學者は、之を一笑に附して顧みず、何となれば此説の根據は假定にして一も實
 驗的ならざる故なり、然れども宗教上の所説と催眠現象とを比較研究せんとする
 場合には實に趣味ある學説なり。

故桑原俊郎氏は催眠術を行ふ人の精神は鞏固にして不動なるを要す、其不動の精
 神が被術者に感應して催眠するものと解せり、不動の精神につき桑原氏は「精神論」
 中に説明して曰く、

不●動●の●精●神●といふものについても、まゝ古來その道くでいろいろに名をつけて
 居る、専ら自體以外の爲めに働いては利益を與へ、動いては満足を與へ、他の萬有の
 爲めに一生を棒に振る覺悟で、鞠躬盡瘁する動力のことである、我を忘れたる故に
 無●我●我●についで思惟なき故に無●念●無●想●といふ、それが動くから無我の我となり、
 無念の念、無想の想となる。

不動の精神には種々の名あり曰く無爲(老子)、無我(佛教)、無想(同)、無念(同)、阿頼耶識(同)、阿
 頼耶は迷悟二分子を含むといふ説もある、小我の滅せるもの(哲學者)、心(mind)心理學
 者の未だ知情意に分たざる前、神の意にかなへるもの(基督教)、神の御靈の入りしもの
 (同)、罪汚れなきもの(神道)、道心(儒)、中(同)、性善(同)、仁心(同)、誠心(同)、愛心(同)、(基督教)、慈悲心
 (佛教)、懿德(同)、良心(王陽明)等之れなり。

此の不動の精神が一念疑つたらば所謂至誠にして動かざるものは未だこれあら
 ざるなりである、鬼神を泣かしめ天地を撼かすのは皆この力……と。

催眠を行ふ場合に桑原氏の云ひし如き不動の精神を以てせば或は可なり、然れど
 も必ず斯る精神ならずば催眠せしむるを得ずと思ふは大なる誤りなり、心理説

によれば多くの被術者は自己暗示にて催眠す、故に術者の精神状態の如何を問はずして催眠す、而し術者の精神が一心不亂に注集せば従て其肉體も其精神に基きたる様に活動するを以て感應の著しきや論なし、又或學說にては桑原氏の擧げたる佛教に所謂無我、無想、無念、阿頼耶識と云ふ如き精神状態は、一般に術者の精神にあらざりて催眠者の精神が其れと合致するものゝ如く見解せり、學者の研究を望む所なり、然り而して桑原氏又曰く。

「その管理者は萬有自身の精神で、萬有が自動しつつあるといふ見解と、萬有は他の靈物に管理せられて居る、萬有個々の意に任せぬことが澤山ある、生滅の如き物自身には今暫らく長らへたしと思ふ念ありながら、命數を奪はるることがある、何か宇宙には萬有が勝つ能はざる至大至剛の力があるに相違ない、萬有を左右する大元帥が萬有以外にあるに相違ないといふ見解とある、そこでこの管理者をいろ／＼に古來名づけてをる、物質を左右し現象界を自由にする其大勢力を種々に名づけてをる、次に擧げてみませう。

之を至大至剛の力と云ふ曰く眞空(佛哲)、法性(同上)、天(儒家)、大我(哲學者)、實在(同上)、眞如

(佛哲)涅槃(同上)、梵天(婆羅門教)、太極(儒家)、絕對(スピノーザ)、絕對的精神(ヘーゲル)、實體(佛哲)、本體(同上)、自然力(理學者)、夜氣(孟子)、無名(老子)、不可思議力(佛教)、眞理(同上)。

之を至大至剛の力といふのは孟子の詞を借りたのであるけれども孟子が之を自家心上に求めたとは違ふ、予の至大至剛の力といふものは自家といふ一個の小物體中に之を眞くのでは無く、之を空間全體に眞くのである、空氣の無き處はありともこの力の達せざる處はなく、如何なる微物中にもいかなる極大の物の中にもいかなる至堅のものの中にも、いかなる軟弱のものの中にも處としてあらざるなく、ものとして含有せざるなく、微として入らざるなく、細として残すなく、望遠鏡の遠せざる處にもあり、顯微鏡の及ばざる處にも存するは只此至大至剛の力のみである、この意味から至大至剛といふ文字を假りに用ひたのであるが、其の實は何と名づけてよいのか、名は無いのである、至大至剛といふけれども至小至柔の力ともなり、又その中間の力ともなるので、伸縮自在活動自在であるから、名のつけられざる靈物と謂はねばならぬ。

この靈物の力で萬有は變幻出沒せしめられるのである、宇宙間に如何なる大剛者

ありともいかなる強者ありとも、決して此の力に勝つものはない、生物も無生物も一切の萬有は皆此の力に左右せられるのである、予が宇宙は心のみである、一心のみであるといつたのは此の力のことを申したつもりであつた、だから心といふのも適當の名でない、又至大至剛の力といつた處で、この觀念を表彰することは出来ない、その他右に列擧した哲學者、理學者、宗教家等の命名して居る名でも、十分に此のものの事を表白することが出来ない名がない、一切の現象を生む母である「現象其れ自身は此のものと同體」と知れば先づはそれに近い。」

と此説は宗教上より催眠状態を研究する上に大に味ふべき一學説なり、然れども催眠の現象を心理學、生理學の方面より研究しつゝある學者は哲學説は一の假定に過ぎずして實驗に基礎を置かざるを以て反對論を一樣に唱ふ、其反對論の要旨を爰に喋々するは頗る興味ある問題なるも、催眠術を宗教と比較研究する點に於ては左まで必要なきを以て爰には其反對論をば掲げず、其反對説を知らんと欲する者は心理的に説明せる催眠術書を繙かれたし。

而して田岡嶺雲氏が「所謂神通力の哲學的説明」と題し、新世紀第二號の紙上に論じ

たる文中に催眠状態にある人の精神は宗教上に於ける大覺なり、解脱なり、見神も又此主觀的境界に外ならざるなり、と絶叫せり其一節に曰く。

「故に吾人の見地よりいへば神といひ佛といふ、皆吾人が沒我無念の境界を指して之をいふ也、天國は必ずしも天上に在らずして、斯の我の期にあり、即身即佛淨土は必ずしも之を西方十萬億土の外に求むるを要せざる也、我を識れ是れ千古不磨の格言也、只よく我を識り我に反らば、我は即ち佛也、神也、仙也、聖人也、無我の境界は即ち絶對也、惟一也、徧照也、永生也、神通自在也、催眠的状态も此の無我的境界也、禪家の頓悟も無我的境界也、所謂見神なるものも、亦此無我の主觀的境界に外ならざる也、所謂千里眼順風耳なるものも、亦此主觀的境界に外ならざる也。

故に無我の境界は大覺也、解脱也、哲學上の至上の眞也、倫理上の至上の善也、宗教上の至上の尊也、極致也、第一義也、所謂神通力は即ち此無我の境界の靈動也、心靈肉身の桎梏を跳出すれば、則ち此の靈動ある也。

人の識が唯相對を識り得るのみなるが如く、人の言語も唯相對を説き得るのみ、絶對の境界は恍惚なり、其境界に在るもののみ獨り自知すべく、言語の以て説き得べ

く傳へ得べきものに非ず、知る者は言はず、言ふ者は知らず、無我の境界は言説不到也、此境界に在るものよりいへば歡喜也、其境界に到らざるものよりいへば疑惑也、神通力は其の之を有するものには可思議にして、有せざる者には竟に不可思議也」と。

此説は催眠状態と宗教上の現象とを面白く説明しあり、極端なる科學的論者を除く外多くの學者の首肯する所なり、科學一點張の頭腦を以て居る者は宗教上の所説をも多くは非定す、之れ宗教上の所説の多くは科學的に説明し得ざること多きを以てなり、然し科學にて説明し得ざる者も事實上存することあり、一概に非定すべきにあらざるなり。

禪宗に於ける座禪と自己催眠とは其状態を一にし、效果を一にす、從て其方法も多少の差あるに過ぎず、唯自己催眠状態の範圍は座禪状態の範圍より大に廣し、自己催眠状態は、座禪状態より一増深き精神状態を含有すると共に、座禪状態に未だ至らざる精神状態にして、正規の状態より進みたるものをも含有す、座禪のことは拙著「獨習自在座禪之奧義」に自己催眠のとは、獨習自在自己催眠に詳述しあるを以て

爰には之を省略す。

觀法と自己催眠の幻覺、自己催眠にて死したる父母の幻覺に面會して喜ぶことを得、或は一室に居り乍ら幻覺にて遠き松島や嚴島に遊びて娛むとを得るは人のよく知る處なり、正規の状態にある者と雖も、遠く離れ居る親しき友人の容貌言語を無心の状態にありて想像すれば、其席には何人も居らずと雖も、然も其友人が傍にいつもの如く居る様に其容貌が觀念に現れ、其言語が觀念に聽ゆるものなり、其場合に於て瞑目して想像すれば、猶一層明かに現はるものなり。

佛教家が極樂淨土を見る方法として能く唱ふる所の觀法は、觀無量壽經に詳細を極めり、在昔世尊が王舍城の韋提希夫人の爲めに説き給へりしものにて、蓋し之れ即ち幻覺を見る練習法に外ならざるべし、觀法とは注意を極樂淨土の觀念に凝集し、以て極樂淨土を眼前に顯現せしむるの法なり、是に十六の階段あり、一に日觀二に水觀三に地觀四に樹觀五に池觀六に總觀七に華座觀八に佛菩薩像觀九に佛身觀十に觀音觀十一に勢至觀十二に普往生觀十三に雜明佛菩薩觀十四に上品生觀十五に中品生觀十六に下品生觀是なり、今此の十六觀法の如何なる者なるかを福

來博士の催眠心理學より抄出すれば左の如し。

第一 日觀 日觀とは日輪を觀念して之を眼前に顯現せしむるの觀法なり、然れども最初より只日輪の純粹觀念によりて之を見ること甚だ困難なり、故に此の觀法を行はんとするもの先づ西方に向つて正座し、眼を微開して落日を凝視すべし、凝視すると暫時にして閉眼し、然る後專心想を凝らして日輪を觀念し、且つ其の感覺像を眼前に現はさんと努力すべし、實際の日輪暫時凝視したる直後には眼の網膜には其の殘像あり、終に此の殘像を手掛りとして心に觀せる日輪を見んとする時は、何等殘像なき時に之を行するよりも成功し易き理なり、專心之を行して怠らざる時は、終に閉眼開眼分明に日輪の感覺像を見るに至るべし、之を日觀となす。

第二 水觀 日觀行し終れば次に水觀を行すべし、水觀とは水を觀念して水を見るの法なり、其の方法は前に準じて知るべし、即ち先づ澄清なる水を凝視し、然る後之を專心觀念して水を觀るに至るべし、已に水を見終れば氷の映徹なるを凝視し、然る後瑠璃の觀念をなして之を見るに至る、瑠璃已に見終れば次に瑠璃地を見んとすべし、經に曰はく、下に金剛七寶の金鐘ありて、瑠璃地を繋ぐ其の鐘の八方には

八楞具足し、一一の方面百寶の所成なり、一一の寶珠に千の光明あり、一一の光明八萬四千の色瑠璃地に映ず、億千の日の如くにして具に見るべからず、瑠璃地の上は黄金の繩を以て雜廁間錯す、七寶を以て界し、分齊分明なり、一一の寶中に正白色の光あり、其光は華の如く、又星月に似たり、虛空に懸處して光明臺となる、樓閣千萬百寶合成す、臺の兩邊に於て各百億の華幢あり、無量の樂器以て莊嚴をなす、八種の清風光明より出づ、此の樂器を鼓つて苦空無常無我の音を演説す、是れ世尊の所謂瑠璃地の光景なり、之を觀るを得て水觀なる。

第三 池觀 水觀已に成就する時は、瑠璃地の實景開目閉目了々歷々として眼前にあり、經に曰はく、唯食時を除きて恒に此の事を憶へ、此の如く想ふものを名けて巖く極樂國地を見るとなす、若し三昧を得ば彼の國地を見ることが了々分明にして具に説くべからず、是を地想となすと、三昧とは一意專心精神を一點に凝集して、他意なきの精神状態なり、地想とは地觀なり。

第四 樹觀 地觀成就すれば次に樹觀を修すべし、樹觀とは寶樹の觀法なり、經に曰はく、寶樹を觀するものは一一之を觀して七重行樹の想を作す、一一の樹高さ八

千由旬其の諸の寶樹七寶華葉具足せずと言ふことなし、一一の華葉異寶の色を作す、瑠璃色の中に金色の光を出し、玻璃色の中に紅色の光を出し、瑪瑙色の中に磤磤の光を出し、磤磤色の中に綠真珠の光を出し、珊瑚琥珀一切の衆寶以て映飾をなし、紗真珠網樹上に彌覆す、一一の樹上に七重の網あり、一一の網間に五百億の妙華宮殿あり、梵王宮の如し、諸の天童子自然に中に在るあり、一一の童子五百億の釋迦毘楞迦摩尼以て瓔珞となす、其の摩尼の光百由旬を照らす、猶百億の日月を和合する如くにして、具に名くべからず、衆寶間錯色の中上なるものなり、此の諸の寶樹行々相當り、葉々相次ぐ、衆葉の間に諸の妙華を生ず、華の上自然に七寶の果あり、一一樹葉縱廣等にして、二十五由旬なり、其の葉千色にして百種の畫あり、天瓔珞の如く、衆くの妙華ありて、閻浮檀金の色を作す、旋火輪の如くにして、葉間に宛轉す、諸果を涌生すること帝釋の餅の如し、大光明ありて、幢幡無量の寶蓋を化成す、是の寶蓋の中三千大千世界の一切佛事を映現す、十方の佛國亦中に現す、此の樹を見已りて亦次第して一一に之を觀し、樹莖枝葉華果を觀見して皆分明ならしむべしと。

第五 池觀 次に池觀を修すべし、池觀とは極樂淨土にある八池水を觀現するの

法なり、經に曰はく、極樂國土に八池水あり、一一の池水は七寶の所感なり、其の寶柔樛にして如意珠玉より生ず、分ちて十四支となす、一一の支七寶の妙色を作し、黄金を渠となす、渠の下皆雜色の金剛を以て底砂となす、一一の水中六十億の七寶蓮華あり、一一の蓮華團圓正等にして、十二由旬なり、其の摩尼水華間に流注し、樹を尋ねて上下す、其の聲微妙にして、苦空無常無我、諸の波羅密を演説し、復諸佛の相好を讚歎するものあり、如意珠玉金色微妙の光明を涌出す、其の光化して百寶色の鳥となる、和鳴哀雅にして、常に念佛念法念僧を讚す、是を八功德水の想となすと。

第六 總觀 地觀樹觀池觀の凡てに觀する所を合切して之を觀するを總觀と謂ふ、經に曰はく、衆寶國土の一一の界上に五百億の寶樓あり、其の樓閣の中無量の諸天あり、天の妓樂を作す、又樂器あり、虚空に懸處して、天の寶幢の如し、鼓たずして自ら鳴る、此の衆音の中皆念佛念法念比丘僧を説く、此想成し已るを名けて、巖く極樂世界の寶樹寶地寶池を見ると爲す、是を總觀の想と爲すと。

第七 華座觀 已に極樂の寶樹寶池寶地を觀し得たる上は、更に進んで無量壽佛及び觀音勢至の二菩薩を觀せんとすべし、併し此には尙準備の觀法を要す、華座觀

是なり是れ蓮華の觀法なり、經に曰はく、彼の佛を觀せんと欲する者には、當に想念を起して七寶の地上に蓮華の想を作すべし、其の蓮華をして一一の葉上に百寶の色を作さしむ、八萬四千の脉ありて猶天畫の如し、脉に八萬四千の光あり、了了分明にして皆見るを得せしむ、華葉の小なるものは廣縱二百五十由旬なり、是の如き蓮華具に入萬四千葉あり、一一の葉間に百億の摩尼珠玉あり、以て映飾となす、一一の摩尼珠は千の光明を放ち、其の光蓋の如し、七寶合成して地上に徧覆す、釋迦毘楞伽寶は以て其の臺となる、此の蓮華臺は八萬の金剛瓊瑤、寶摩尼寶妙真珠網を以て枝飾となす、其の臺上に自然の四柱の寶幢あり、一一の寶幢は百千萬億の須彌山の如し、幢上の寶幔は夜摩天宮の如し、復五百億の微妙なる寶珠あり、以て映飾となす、一一の寶珠は八萬四千の光あり、一一の光は八萬四千の異種金色を作す、一一の金色は其の寶土に徧し、處々に變化して各異相を作す、或は金剛臺となり、或は真珠網となり、或は雜華雲となり、十方の面に於て隨意變現して佛事を施作す、是を華座の想となす。

第八 佛菩薩像觀 第七華座觀を畢りぬれば、次に佛菩薩像を觀すべし、經に曰は

く、彼の佛を想ふものは、先づ當に像を想ふべし、閉目開目一の寶像閻浮檀金色の如くにして彼の華上に座するを見る、像の座するを見已れば、心眼開くを得て了了分明に極樂國の七寶莊嚴寶地寶池寶樹の行列するを見る、諸天の寶幔其上に徧覆し、衆寶羅網虛空の中に滿つ、此の如き事を見る極めて明瞭なること、掌中を觀るが如く、なさしむ、此の事を見已れば復當に更に一大蓮華佛の左邊にありとなすべし、前の蓮華の如く等ふして異なることあるなし、復一大蓮華佛の右邊にありとなすべし、一の觀世音菩薩像左の華座に坐すと想ふべし、亦金色をなすこと前の如くにして異なることなし、一の大勢至菩薩像の右の華座に坐すと想ふべし、此の想成る時佛菩薩の像皆光明を放つ、其の光金色にして諸の寶樹を照す、一一の樹下に亦三の蓮華あり、諸の蓮華上に各一佛二菩薩の像ありて、彼の國に徧滿す、此の想成る時行者は當に水流光明及び諸の寶樹鳥鴈鴛鴦皆妙法を説くことを聞くべし、入定出定恒に妙法を開く、行者の聞く所は出定の時憶持して捨てず、修多羅と合せしむ、若し合せざるものは名けて妄想となす、若し與に合せば名けて巖想に極樂世界を見るとなす、是を像想となす。

尙右の外に入観を殘すと雖煩を厭ふて之を略す、要するに右の如き事は觀念と幻覺との關係に就きて充分なる心理學的知識を有せざる人に向つては、荒唐無稽の詩的空想とのみ思はるゝならんも、右關係の心理説を理解する人に向つては、實際有り得べき事にて、決して空想とは思はれざるなり。

以上は福來博士の説なり此觀法の説明方にも種々あり、博士の説明と異なる説明もあるも、余は博士の説を妥當と信じて之れを舉げり、之れを催眠術上に於ける自己暗示の結果と見れば容易に説明するを得現に著者は自己催眠にて神佛を有形的に幻覺にて見たること尠ならず、又自己催眠にて神佛を無形的に精神上に感覺したること又尠なからざればなり、其方法は拙著「自己催眠」に詳述しあり、故に爰には之を省略す。

人格變換と佛教催眠術の現象中に人格變換と云ふことあり人を催眠せしめて汝は犬なりと云へば被術者は犬の積りにて四ツ匍ひとなりて歩む、即ち人が犬に變換したるなり、男が女に老が少に美が醜に愚が智にも變換すること自在なり、此現象を二重人格とも云ふ、之れを故桑原俊郎氏は佛教に所謂「煩惱菩提」「娑婆寂光淨土」

儒家の「人心道心」朱子哲學に「本然之性、人慾之私」と云ふは即ち之れと同一様のものなりと云へり、眞に然るか。

精神力により無機物を左右す催眠術を施す方法を哲學上即ち精神靈動的に説明する者は術者は被術者をして催眠せしめむ必ず催眠せしむとの意思を強固に集注すれば術者の精神力が被術者の身心に及ぶことは、恰も無線電信が此方より彼方に及ぶに異ならず、此理によりて精神力一つにて此世に存する者は何にても有機物は勿論無機物と雖も、左右し變化せしむるを得、從て宗教上の奇蹟も或者は之によりて説明するを得との説あり、左に抄出したる高橋五郎氏の説の如き之れなり、……唯物論の極點に達し轉じて精神界研究の盛んなるに至り茲に降靈術が勃興して來たのは丁度唯物論と正反對に行く譯で宇宙は物質計りでない否物と云ふは靈の爲めに支配されるものであると云ふことを證明するものになつて來た、或る哲學者などは今に宇宙間一切の出來事は皆精神に依つて自由に左右することが出來得る、雨を降らせ様と思つて我精神を以て雨に命ずれば雨降り、風が吹いて海が荒れる時は海に叱咤すれば風止むと云ふ如斯ことまで極言するに至つたの

である所が其れが徒らに空論に止まらずして歴歴として現象の上に證明され來つたのである、彼の基督教の聖書の中にも例へばガリラヤの海の上に基督が船中に心地好く睡つて居つた其時に俄かに荒風が起つて來て船が轉覆しか、らふとしたので弟子達が惶て、大變である船が轉覆しか、つたと云ふと基督眼を醒まして曰く汝等何んぞ信仰薄弱なるやと云ふて突直風雨に號令した、鎮まれ……而るに忽ちヒツたと靜平に歸したのである、弟子達畏れて如何なる人を風も海も悉く命に従ふとぞ感嘆したと云ふことがあるが現今の哲學者の論で云ふとツマリ昔しに有つた事を今日に繰り返へすことを得る、精神を以て萬物を動かすことが出来る是れが唯物論の盛なる時に當つて起つたので面白い所謂極端より極端に移つたのであると。

近來我國にも此説の如き精神力によりて何事でもなし得との説を抱けるもの甚だ多し、中には精神力一つにて家屋をもぐらう、大地震の如く動かしむると迄極言したるものあり、唯或る人は精神靈動説のみを覗ひて心理學上の説を充分に含味し實驗せずして獨斷するものあるは大に遺憾とする處なり。

催眠應用の布教東京麹町區飯田町にユニヴァサリスト教會と云ふ基督教會あり、一日三普良と云ふ人が催眠術と宗教的信仰と題して大演説をせらると聞き、著者も往きて拜聴せり、其演説中に次の如き要旨見へたり。

「……催眠術は人の意思を左右す、術者が催眠者に向つて左と云へば左右と云へば右、一々術者の云ふ通りに催眠者はなる故に宗教を布教する上に於て如何にしても宗教を信ぜず、反抗し却て罵詈嘲弄をする様の者には、催眠術を施して神の有り難さを暗示すれば、直に暗示通りとなる、布教法として實に良法ならずやと云ふものあるも、如何……云々……と。

宗教を信ずると否とは其人の自由により、又何れの宗教に依るも又其の自由なり、此事は我憲法にも明記しあり、其自由の意思を斯く直接の手段を執りて左右せんとするは非難を免れざるべしと雖も、宗教布教の上には不知不識擴張の催眠術を應用せり、如何となれば彼の神社佛殿及び教會の建築は、普通の家屋と異なる構造となし、屋内にも又普通の家になき講壇或は神鏡其他の者を飾りて莊嚴ならしめ置き、祈禱或は讀經をなし而して後に演説或は説教を行ふ故によく其演説説教が信

者の腦裏に受け入るなり、之れは心理的に催眠法祈禱或は讀經を施し、治療矯癖の暗示(演說說教)をなすなり、二者の原理手段一致せり、此事に就ては尙委しく後に述べることあるべし。

第四章 宗教上の奇蹟と催眠術の現象

宗教上の奇蹟とは何ぞや、何れの宗教にも奇蹟あり、奇蹟中の多くは學理を以て説明すること能はざる不可思議の現象なり、學理の應用としてなし得ることなれば學理さへ研究すれば何人にも爲し能ふ所のものなり、宗教上の奇蹟中學理にて説明することを得るものありと雖も、到底學理を以て説明し得ざることあり、其點は虚偽を傳へし者にあらざるか、余之を知らず、然れども奇蹟なるものも、宗教上に於ける修養を積むで止まざれば、必ずなし能ふ所ならんと信ず、殊に驚くべきは簡易に學び得る催眠術の應用にて、宗教上の奇蹟と稱することの多くは實現せしむることを得否、宗教上の奇蹟として不思議に堪へざる處より、猶々奇怪十百萬の現象を起すこと敢て難きにあらざるをや、催眠術家として一時世に知られたる故桑原

俊郎氏が「精神靈動」中に論じて曰く、

「予は此(催眠術)研究をしながらつた前には宗教上の奇蹟といふものは丸で嘘を書いたものである、あんな事でも書かなければ、キリストなり釋迦なり弘法大師親鸞上人日蓮上人等の價值の高めやうがないから、愚民を迷はす種、迷信者を釣り込む策として書いたものだ」とばかり思つた、まことにあさましいすまぬ考へであつた、今ではそれらの奇蹟は皆出來たに相違ない、予の如き罪深き悪人ですらも多少の奇蹟めいたことが出来るから、況んや、大聖人たる彼の人々ではどんなことでも必ず出來たに相違ないといふことが信じられる、と催眠術を研究したる者は皆等しく然か思ふならむ。

佛教の三界唯一心と催眠状態故桑原俊郎氏は又曰く、

「……催眠術から易の大極無極も、佛者の三界唯一心といふことも、老子の大道無名天地之始も、盡く説明することが出来るのである、眞理といひ眞如と云ひ、大圓覺といひ、大日如來と云ひ、阿彌陀如來と云ひ、釋加如來と云ひ、阿頼耶識と云ふもの一々實現せしめて試験してみることが出来る、まことに催眠術の賜である。」

又この實驗から幻術狐狸の憑依神佛の夢の告げ、生靈死靈棒寄せの術、イチコの行ふこと、神通力孟子浩然之氣、火伏せの術、熱湯をさます術、火箸を曲げる術、隱身術等、これまで世人に半信半疑を與へたことが悉く信すべきことであるといふ證據も見出されるのである。と余が曾て公にしたる「驚神的大魔術」と云ふ書に催眠術の應用で降神術、禁厭術、見神術、幽靈對話術、真言秘密術、精神感傳術、天眼通術、火渡術、狐遣術、讀心術、骨相術、忍術、仙術、幻術、氣合術、棒寄せ術、火箸曲術、武道竹折術、地獄極樂漫遊術等を實地に行ひて幾多の學者に示したること及び其れが理論を記し置けり、有志の士は御參照あらんことを。

雲照律師の催眠術と佛教の奇蹟論雜誌東京エコーの記者銀牙魔王子目白の十善寶窟を訪ひ生佛の名なる雲照律師に會し質問して曰く。

「佛教は三明六通と云ふ事を説けり即ち神通力なり、然るに現時心理科學應用の催眠術なるものあり其類似する所少なからず、例へば彼の釋迦が池の水を與へて病を癒せし如き基督が汝の信汝を癒せりと稱せるが如き彼の催眠術上の暗示に合同せるものあり、否今日の催眠術者精神科學者は古代の名僧智者が奇蹟を行ひた

るは皆此催眠術を應用したる者となせり奈何ん、果して然らば現今の僧堂を廢して將に催眠學校を設立すべきものなり。』律師答へて曰ふに「孔子の言に似て非なるを惡むと氷と水晶とは似て同じからず、今日の催眠術は新たに西洋より來れるや否やを知らざれども現に數千年前釋迦在世に於て印度の幻術師と稱するもの、盛んに之を應用せる事到底今日の比に非ざるなり、催眠術に於て此奇異を示すも佛教には何等影響する所無し、狐狸すら尙人を訛す、是を業通と云ふ催眠術が人の病疾を治すとも釋迦の奇蹟に對して、些の痛痒なし、宇宙の廣大なる佛教は此小き一催眠術に依らざるも尙他に多大の神通作用あり、大日如來の大眞實の法は凡夫を變じて佛となし、邪を變じて正法となし、汚土を轉じて淨土となす、昔し釋迦佛在世の時印度摩加陀國を不害國と稱す、これ劫初より以來死刑を行はず、唯餘の四刑に止る故に不害國と云ふ、或る時殺人犯の者眼を剜られ、脚あしれて國境の曠野へ捨てられたり、罪人は寒さと飢とに苦められ、創痕の痛苦營ふるものなし、氣息奄々として佛を念ずらく釋迦牟尼願くば來つて我が此の苦痛を脱せしめよと祈ること切なり、忽ち釋迦來りて藥物を與へ撫慰して去る、彼れ忽ち眼も足も癒え喜びに堪へ

ず漸く蘇息して苦境を脱することを得たり、又或時提婆なる者大象に酒を吞ませ之を怒らしめ釋迦說法壇に向つて慕進せしむ茲に於て醉象は狂奔怒號して將に一蹴の下に粉碎し去らんとす、釋迦縱容手を舉げ五指を垂る、や五頭の猛獅現はれて奮迅の勢を示す、大象怯れ頭を垂れ逡巡して去る、或人釋迦に此事を問ふ答て曰く吾れ敢て犯罪者の許に至りしに非ず然れども彼れの信念の力と佛の大慈悲心と相應じて茲に其示現を見たる耳是れ予の知らざる所なり、又彼の大象に對して別に予が幻術を用ひて獅子を出せしに非ず如來慈善根の力、大象それ自身が茲に獅子を感見せしなりと云へり、佛の神通と稱するは如斯ものなり、豈に故らに催眠術を用ひたるものならんや、

此律師の回答を讀んで學者は如何の感をか爲す徒に聲のみを大にし、不可思議のことのみを列擧したるに止まる、宗教家の多くは此類の語を成し學者の疑惑を益々深くするは甚だ遺憾に堪へざる處なり。

六神通力と催眠術、羅漢には六神通力ありと云ふは迷信者を釣る手段として虚妄のことを言ひ觸らしたる者にあらずと信ず、六神通とは何ぞ、一に天眼、二に天耳、三

に神足力、四に宿命、五に他心、六に漏盡、此六種を云ふ。

第一の天眼通は催眠に於ける天眼通と同様にして、坐ながら遠方のことを實地其場に行きて見たると同じ様に見ることを得る方法にして、第二の天耳は遠方の微音をよく其傍にありて聴く如く感ずるを云ふ、自己催眠と同種の座禪状態にありて、線香の灰が落つる音が非常に高く聴へたりと云ふが如きは此類なり、換言すれば聴覺の鋭敏なり、第三の神足力は如意身とも云ひ、心で物質を支配することなり、生竹を焼く場合に豫め其の竹の節を算して、此竹は焼くも破裂して音響を發することなしと精神を強固に持ちて後其生竹を火中に投ずるも、決して破裂すること爲し、其れは催眠術に於て術者の精神力が被術者に波及すると同様の原理にて、術者の精神が物質を支配するなり、第四の宿命とは自己及び他人が前世に於ては如何なる形を有したるかを知る法なり、靈魂は不滅なるを以て、吾人の靈は前世にも今世にも同様なるも、身體は變れり、前世には如何なる身體にてありしかを知るなり、其れを知るには催眠術を應用したる彼の降神術にて過現末の事を知ると同じく、吾人の前身も知れ得る道理にあらずや、第五の他心とは他人の心を知る法なり、

催眠術上意思の交通と稱する研究は甲者の心に思ひたるところが乙者の心に通ず、之れ即ち佛教の他心ならむ第六の漏盡とは生命の終を知る力にして、彼の西行法師が釋迦の命日に死すとのことを豫言し歌ふて曰く、

同じくは花の下にてわれ死なむ

そのきさらぎの望月の頃

と、而して釋迦の命日に後れしこと僅か一日にして死せりと云ふ、此現象は催眠術上自己暗示を以て解釋することを得、即ち吾は何年何月何日必ず死すと確信して動かざれば必ず其日に死すものなり之れは神に三七日の斷食をなせば必ず己の病氣は治すと信じ、斷食の後必ず治したる如きと原理は同一にして、自己暗示と云ふことを得、此六神通力の解説に就ては異説あり其事は拙著宗教の奇蹟に述べ於けり。

天眼通・天耳通・催眠状態との關係は著名の事實にして興味ある問題なるを以て尙少しく之を論ぜん、高橋五郎氏が東京エコーの第二卷第三號の紙上に交霊術と題して論じたる中に次の如き文見えたり。

「……靈と云ふは甚だ廣い幽靈許りではない明靈もあると云ふ譯になる、左ふ云ふ工合に眼に見えないものが人間普通より穎敏になると見えたり聴えたりする催眠術を藉りて行ると時に現はれることがある、或は千里の先きを見たり聞いたりする佛教の天眼通天耳通と云ふが其れの大なるものであつて、確かに事實である、眞實に有り得べき事である、ソコで殊に靈界と云ふものは物質界でないものが存在すれば之と交通することが出来得べきものである、降靈術は其れである、催眠術の現象中、天眼通は最も奇とする處にて、其原理は心理説にては二重人格論を以て解釋す、靈魂説にては宇宙の精神の働きによると解説す、其詳論は至難にして、僅少の紙面に於て盡す能はざるを以て、専門に論じたる書に譲る、催眠術にて遠方の出來事を知ることを得、不透明なる箱中の物を見當てることを得るの類は、催眠術研究の初學者をして成功せしめたる處にて人の能く知る處なり。

彼の催眠術にて突然他人の手足を不體状態とし、昔時不動の金縛と稱したる奇現象を呈せしむること、基督が重病者を忽然全治せしめたる如く、催眠術家が患者に對して一言暗示したる丈にて重病者を根治せしめたることも敢て珍しからず、之

を要するに催眠術を以て宗教上の奇蹟として、人の噴々する所の現象は幼稚の催眠術家の能くする處なり、催眠術の研究は日進月歩の勢を以て益々進歩發達し、新らしき奇現象を呈しつゝあり、余は『宗教の奇蹟』と題せる一書を近日中に公にする積りなり、同書には各宗教に於ける古今東西の奇蹟を悉く集め、其れを現今の哲學、心理學、理化學及び催眠學の上より觀察し、評論する筈なるを以て詳細は同書に譲る。

第五章 神佛の靈驗と催眠術療法

神佛の靈驗とは何ぞ、神佛の靈驗として人の噴々する所は或は大病人が百萬遍の御經を唱へて全治したりとか、又或人は百度參をなして己れの思ふ所を成就せしめたりとかなり、此現象ありてこそ初めて神佛の有り難きを感じするなり、然れども之れを科學的見地に立て批評せば神と云ひ佛と云ふ者は愚夫愚婦の信ずる如き金箔を以て飾れる木像にあらざる、巖穴に棲息する狐蛇の類にあらざるして各自の心内にあり、御經や御參りをなせば自己の望みを神が必ず達して下さるに相違な

いと豫期して其れを實行する故其豫期通りの結果を得るなり、換言すれば自己暗示なり自己催眠の結果なり、果して然らば、神殿或は佛堂を莊嚴に裝飾する必要なきに似たり、況んや木像を飾りて其れに供物を具へ、再拜又九拜せしめ、賽銭を集むるは嚴正に論すれば甚だ穩かならざる所爲なるに似たり、然れども之れ又一を知りて二を知らざる迂論なり、古へより我國に傳はらし習慣あり、學理を以て説明すること能はざる大理由あり、之を忽然改めんとするは公安に尠なからざる害あり、且其神殿をば神々しくして如何にも神のまします如くし、神の存在すると云ふ觀念を高め而して信仰心を強ひるなり、其れが暗に吾人の所謂自己暗示を強ひる手段となり居るなり。

催眠術の療法とは何ぞや、催眠療法中依他催眠法は術者が患者を椅子に懸らしめ、或は寢臺に横臥せしめ置き、術者が妙な手つきをなし、何にやら口に唱ふると忽ち深き眠りとなる、其催眠者に向つて術者が患部に手を當て、汝の病氣去れりと云へば、今の今迄苦悶甚しかりしもの何れへか消へて跡なきこと春雪の如く、此有様は恰も昔基督が患者の病を治したるが如し、基督は汝の信汝を救へりと云はれたる

よし、即ち患者の病氣治したるは、基督が治したるにあらざ、病人が基督と云ふ偉大なる人格の備はれる人否神の言語が掛れば必ず治すに相違ない、との確き豫期心の結果なり、換言すれば自己暗示の結果なりとのことを基督は明言せられたり、自己催眠、催眠術治療の中に術者の手を藉らずして患者一人にて自ら我身に催眠術をかけ、自ら我身に暗示をなし、而して病氣を治する方法あり、之を自己催眠と云ふ、患者は椅子に懸るなり、布圍を敷きて横臥するなりして、催眠の術式を獨りで行ふ、と忽ちにして前後不覺の状態となり、暫時にして覺醒し見れば痛む所は去りて健康の體となり居る、其催眠中に過現末の状況や、遠方の出來事を語りて百發百中たることあり、其有様を降神術と呼ぶものあり、自己催眠のことは拙著、獨習自在自己催眠と云ふ書に詳かなるを以て敢て茲に贅せず、之れより、催眠術療法と、神佛の靈驗とに關係ある諸大家の説を掲げ、少しく卑見を加ふることにせん。

信・仰・と・精・神・療・法・總・て・精・神・療・法・に・は・信・仰・が・伴・は・ざ・れ・ば・效・驗・な・き・を・常・と・す・信・仰・と・は・何・ぞ・や・精・神・療・法・と・の・關・係・如・何・に・つ・き・桑・原・氏・は・曰・く、

「今精神治療に就て論じて見るに眠らされて暗示を與へられる時は、病は平癒するといふことに疑を容れないのは信である、さういふことは有り得べきものであると信ずる是れは、信の部分であるが、まだ仰は起て居ない。精神療法で癒して頂けるに相違ない、癒るに間違ない、それ故にありがたいといふとき始めて、仰といふことが起つてをるのである、その仰の起つた時は病の癒えることが甚だ速であるとして必ず癒る。只、信だけでは癒ることが晚い、信の上にも一つ、仰が添ふときは觀念頗旺盛、思惟甚強剛となるので、平癒の上に非常な力が生ずる、そこで早く癒るといふことになる、必ず癒るといふことになる。信仰さへあれば必ず癒る、信仰とは自己の判断を、全然打ち捨て、他人の意志に、吾が心身の總てを任せることである、所謂犠牲となるのである、城を明け渡しにすることである、それさへ出來れば病は必ず癒る、又他人のいふことを信ずることの出來ない、疑の深い人は前にもいつた如く眞理を發見して、眞理を信じ、眞理に心身の總てを獻じてしまへば病は必ず直る。」

と眞に然り豈に夫れに相違なからん然れども進歩したる催眠術療法になると思
 者が少し位い疑ふも否反對するも催眠に陥れて仕舞ふ催眠に陥りさへすれば最
 早萬事術者の言ふ通りとなる手足動かすを得ずと云へば其通りとなる従て重病
 をも根治せしむることを得るなり。

高橋五郎氏が「東京エコー」の紙上に論じたる中に次の如き説ありたり。

「例へば信仰療法精神療法など云ふものが續々として西洋各國に起つて來た、
 所が其れは聖書の中にあることが基督が人の病を癒したなども其である基督計
 りでなく弟子も其れを爲した例へば眼が見えない足がきかない者がある而する
 と基督を信仰すれば足が癒ると信じて何卒神の子基督子を救ひたまへと云ふ基
 督は汝信するかと云ふ信じます然らば立て——と一喝すればフィと立つて了ふ
 又弟子のペテロと云ふ者が基督が世を去つてから或時宮へ行つた時に宮の門の
 側に一人の甕の乞食が居つて何卒一厘錢を與へよと云ふ其時にペテロは手に金
 錢無し只吾に有る所のものを以て汝に授く基督汝に命ず立て——フィと立つた
 精神力で如何なる病でも癒ると云ふことは今日證明されて居る基督が癒した事

と大小の區別こそはあつても同じことであると云ふのが分る……
 精神と云ふものは何んでも動かせる即ち風雨天象でも叱咤する事が出來ると云
 ふのも必ずや妄想でない出來得べきと信ずるものである左う云ふ譯で催眠術は
 卑近のものであるが降靈術は極めて高尚なるもの基督や釋迦の如き偉人は催眠
 術に依らないで直接に幽冥界と交通する事が出來た催眠術と云ふ働きは能く肉
 體の作用を一時停止させて精神計りの力を運用するから效驗あるので肉眼で物
 を見ずして靈で見るから肉體で見えないものでも見ることが出来る……
 基督や釋迦は千歳の今日に於ても萬國の人が神と崇め佛と信ずる程の絶大なる
 方でありし故催眠術に依らずして催眠術によりて得たると同様の精神状態を得
 而して直接に幽冥界と交通する事を得たるなり吾人の如き凡人は催眠術により
 て其の精神状態を得るに如かざるなり高橋氏の云ふ如く精神力に依りて風雨で
 も意の儘に起したり止めたりすることも或は修養の結果成し得るや計り難し若
 し斯ることを成し得るに至らば其人は既に人に非ずして神或は佛と稱して可な
 らむ催眠術によりて基督の如く甕を立たしめたることも枚擧に遑あらざる程な

ることは催眠術雜誌上にて時々報告したる所なり。
催眠的療法を主とせる宗教、丁酉倫理講演集に「新らし信仰と心理的治療法」と題したる文中に次の如き説見へたり。

「宗教の起源と特質とをお話すれば、此等は一朝にして起つた様に思はれるけれども、黒住教、金光教は幕末に起り、天理教、蓮門教は明治初年の産物である、それ故さして舊い歴史を有する宗教ではない、過去十年位は極めて微々たるものであつたが一朝にして盛になつたのは要するに民心の缺陷を充實するに適當であつた爲めである、何故此等の宗教が民心の缺陷を充實するに適當であつたかと云へば吾輩の考に依れば第一此等の宗教は土着的國産的のものである、多少とも皆日本の色彩を有して居る、神道の流を酌んで居る、第二は通俗的である、佛教の如く浩瀚な經典なく、耶穌教の如く疑問の起る經典もない、中には殆んど經典を持つて居ないと云ふものもある、第三は其教が現世的で、テトトリ早い、一人之れを唱へて萬人直ちに之を理解し得るといふ程のものである、又寛容放任である、酒色の點に於ても日本の家庭に當符つて、少しも急窟でない、其上此等の宗教の一大特質は黒

住教(我は能く之れを知らず)には餘りうたつて無いが金光教や天理教などにはオカゲと云ふものがある、即ち神が信者に特殊なる恩寵を與ふる事で多數の信者は「オカゲ」を得んが爲めに信するのである、オカゲとは何であるかと云へば重に病を治すること、幸を與へ、災を取り除けることである、それ故吾輩の考では、此等の宗教の本旨は其の一二を除けば荒廢せる人生に慰藉を與へ、未來の安心を得させ、絶對と個人との關係を定めて以て個人を慰めるが如きものではなくて、形を異にした巫術の如き者で、暗示的に祈禱を以て催眠的療法を行ふものであらうと思ふ……此批評は餘り皮肉で、天理教、蓮門教、黒住教及び金光教の人々の爲めには氣の毒の感なきにあらず、併し其評の適否は學者の判斷に任せん。
宗教の本旨たる絶對と個人との關係を定むるとか云ふ七六ヶ敷ことを喋々として説明するも、學者は首肯するならんも平凡なる吾人は、何んのことやら解せずして仕舞ふ、即ち宗教と云ふ者は人生の贅澤物、偽善家の修飾品の如く誤解するものなきにあらず、催眠治療法を以て直接に其人の苦悶せる心内の煩悶、肉體の苦痛を除くを得ば、其人の爲めには之に増りて難有ことなからん、此意を以て起れる宗教

感應著しき所以なり、殊に催眠術にては被術者を催眠状態となして、而して後に暗示する故是も非もなくよく受け入るゝなり。彼の寺院にて木魚を叩き或は會堂にて風琴を鳴らすは、催眠術上聴覺より來る催眠法を行ひ居るものなり、而して信者の精神を沈靜せしめ心機を一轉せしむるなり、精神沈靜の極を催眠状態と云ふ、寺院或は會堂は薄暗く幽靜ならしむるは催眠室を靜かに薄暗くなし、精神の沈靜を圖ると同一理なり。

兩者は範圍を同ふす、宗教が人の行動に一々關係あるが如く、催眠術も又必ず人の行動の上に關係す、二者共に精神上の研究なるを以て精神の關することには二者共に關せり、從て宗教が宇宙問題に關する如く、催眠術も又宇宙問題に關す、又宗教が哲學心理學倫理學及び教育學に密接の關係あるが如く、催眠術も又之れ等の學科と密接の關係あり。

催眠術の效果は宗教より大なり、宗教の效果は人が奮つて日々の業務を果すべき活力と希望と慰安と光明とを人に與ふるところにあり、催眠の效果も又人として缺くる處を補ひ曲りたるを正し以て完全無缺の人たらしむるにあり、此效果を得

んと欲して宗教によるを近道とするか、催眠術によるを近道とするか、素人は宗教の事を二ヶ月や三ヶ月學ぶも得る所甚だ尠なしと雖も催眠術を二三ヶ月も學ばば直に心機一轉して、胸中の煩悶は何れへか去りて跡なく心力は己の志す有益の件に集注されて雜念起らず鐵の如き石の如き心膽とならむ、催眠術によりて得たる如斯修養は即ち一種の宗教心を得たるなり、喚言すれば催眠術も又一種の宗教なり、僕は世人に宗教を大に研究すると共に催眠術をも又大に研究し兩者の交叉點を明にし、精神修養の資、學術研究の料とせられむことを望むで止まざるなりと、傍に坐せる一宗教家曰く宗教と催眠術と似たる處同し處は一々枚舉に遑あらず否悉くが殆んど同一なりと同席せる某宗教家曰く宗教にては肉體死したる後靈魂をして天國とか極樂とかへ遊ばしむるを以て主眼とするも、催眠術にては其事なし、催眠術は單に在世中のみ心身を強健ならしむるに過ぎず、從つて僧侶は葬式に立會ひ御經を上ぐるも、催眠術者は決して其事をせず、然し後來催眠術者も斯る事を行ふ様になるやも知れず、何者催眠術者の精神は被術者の靈魂に感應せしむとの學說を主張する者多き故此說より云へば一理なきことに非ざるを以てなり

と傍の一宗教家曰く宗教は一時に多人數を濟度する催眠術は一人々々に對して
 施術するに過ぎず此點に於て差ありと同席の宗教家曰く催眠術にても多人數一
 時に施術すると決して無きにあらず否却て太古より大に行はれたる所なり云々
 ……或人は催眠術は木戸錢を取りて見世物に供するも宗教に於ては其事なしと
 云ふも、开は彼の寺院にて寶物や木像を拜觀せしめて拜觀料を徵收すると毫も異
 らず、只一つ異なる處あり宗教にては信者の寄附金を集めて殿堂を建設することあ
 るも催眠術にては其事なし而し後來或は催眠術者も其事を真似るやも知れずと、
 列席の一宗教學者曰く催眠術家は催眠術と宗教とは似て居ると云はるゝを以て
 大に嫌ふ傾きあるも、之れ片見にして事實似て居る故仕方なきなり、而し宗教と催
 眠術とは祈禱の有無を以て區別するを得、と傍の某宗教學者駁して曰く、催眠術に
 ては祈禱は行はざるも宗教に於ける祈禱は催眠術者の云ふ自己暗示の方法なり、
 唯其形と名とを異にするのみ其實體は同一なるを以て區別點とするを得ず、と傍
 に坐せる某宗教家曰く宗教には儀式なるものあり、催眠術には之なし、此點を以て
 區別するを得、と傍の某宗教家駁して曰く、宗教の儀式は宗教の目的を達せん、とす

る一の手段に外ならずして、催眠法の形式と異ならざる主意の者なり、近來宗教上
 に行ふ印を催眠の形式に行ふ如きを以ても知るべきなり、催眠心理と宗教心理と
 は全く同一のものなるや論なしと、
 今迄默然たりし傍の宗教家大に怒りて曰く、宗教は宗教なり催眠術は催眠術なり
 兩者は似て非なるものなり、氷と水晶の如きものなり、異なればこそ別名ある所以
 なり、催眠術は秩序的に學術によりてなるものなり、宗教は概念的なるものなり、
 宗教は學問を以て解説すべからざる處に奧秘あるものなり、宗教の眞價は口や筆
 に寫す能はざる所のものなり、口に云ひ筆に上ぼし得る様の淺薄のものにあらず
 従て催眠術などの遠く及ぶものにあらずと、今迄の議論を謹聽し居りし催眠術家
 某曰く催眠術と宗教とは大に範圍を異にす催眠術には宗教の外教育及醫術をも
 含有す、依て催眠術家たるには大宗教家、大教育家、大醫學者たるの資格を具備せざ
 れば完全なりと云ふ事能はず、然るに今日の催眠術家たる者は如何、此要素具はれ
 る者あるを聞かず之れ大に遺憾とする所なり、今日催眠術を行ふ人の中には如何
 はしき人多からむ併し催眠術なる者は實に高尚なる者にして、學べば學ぶ程其高

大至遠なるを感ずるものなり、之れ恰も宗教其者は神聖にして犯すべからざるものなり、然るに宗教家中に素行修まらざる者多きと同一なりと、語未だ終らざるに傍に坐せる二三の催眠術家先きを争ふて意見を述べんとせり、時に書生來りて只今電話口まで來る様にと某伯爵家より電話がかゝりましたと、よりて著者は一輯して立たんとしたれば來客一同時刻大に過ぎたりとて後日を期して辭し去れり、著者は此問題に就ては少しも卑見なきにあらざるも、未だ盡さざる處ありよりて卑見は爰に述べず、前陳の如き不遜の説を掲げて莊嚴なる宗教に對し禮を缺きたる處其罪至大なり、死を以て謝すべきなり、思ふに宗教が人心を支配する力は實に偉大にして、催眠術家舌を巻いて驚嘆に堪へざる所あり、其は何ぞや、信者が宗教の爲めに淨財を喜捨する其量の多き之なり、宗教の爲めに數萬の財産を一人にて寄附したるもの、或は婦人が髪を断ちて本願寺の材木を引く綱として提供したりと云ふが如き眞に驚かざるを得ざるにあらざるや、見よ、到處の神社佛閣の宏大なる建築を其れに引き代へ催眠術家が漏屋に蟄居する様、とても較べ者にならず、之れ何故なるか、今日催眠術を業とせる者の多くは無學の品性卑きもの、みなればなり

と信ず、今後催眠術を大に研究し利用せんとする者にして相當の學識と品性とを以てせば、或は以外の好果を修むること蓋し難きにあらずと信ず、學者若し此問題に就て高説あらば著者に教を垂れられんことを著者は本書の改訂に吝ならざるものなり。

第二編 宗教論

第七章 宗教とは何ぞや

第一節 宗教の定義

宗教とは如何なるものなるかを述ぶるに當つて、余は先づ其の定義に就きて少しく考へ見んと欲するなり、されど元來宗教なるものは他の哲學科學等と其質を異にし、茫漠多岐多種にして且つ歴史的變遷を有する等の事狀より、此れを明かに定義するは極めて困難なることなり、されど兎に角古來の宗教學者は、此れに對して何等かの定義を與へ居るは事實なるを以て、今は其等の中比較的價あるもの二三を掲げ最後に余が定義を示すべし。

『宗教とは神を知り、且つ此れに眞似ふことなり。』——セネカ

『吾人が道德的義務は神の與へし命令なりと悟る、此れ宗教なり。』——カント

『宗教とは世界を支配する勢力と一致せんことを求むる生活の關係なり。』——ブライデレル

『宗教は吾人を規定し、然かも吾人の規定し能はざる勢力に對する實際的依頼の感なり。』——シュライエルマッヘル

『宗教とは最高者を知ることなり。』——フイテ

『理想的にして人間の情の希望するところと、要求するところとを完全に満足せしむることを得る存在者に關する觀念と感情なり。』——ゲンツ

『宗教とは無限者に對する愛なり。』——ラング

『人間の道德的品性を養成し得る力となりて、顯現する無限を知覺することなり。』——マックスミュラー

右は先者が宗教に與へたる定義の二三なるが其の孰れも或は狭に或は偏に未だ充分に宗教の本質を言ひ盡せるものと考へ能はざるを以て、次に余が最も穩當なりと認むる定義を言はん。

『宗教とは人類が神**的**なる權威に信賴し、以て最後の安心を求むるものなり。』

神**的**とは必ずしも人格的の神を意味するには非らず、唯人間以上のものといふ程の意なり、此れを實際に見るも宗教の對象は彼の物活敎に於けるが如く、トテム敎

に於けるが如く又は佛教に於けるが如く非人格的なるもの又少しとせずされど
 兎に角宗教の客體(對象)となるもの、常に人間以上のもの或は人間以上として考
 へらるゝ所のものたるを争ふべからざる事實なり而して又其等の宗教的客體が
 常に人類に對して一種の權威あるものとして感ぜらるゝことも事實なり假例へ
 そは佛教に於ける眞如などの如く殆ど純理的のものと同も其の人に對するや單
 に形式的なる二二が四風の内容なきものとして感ぜらるゝには非ず實に堂々た
 る權威と勢能とを有するものとして感ぜらるゝなり若し然らずしてそは單に二
 に二を掛くれば四となるといふが如き貧寒無力のものとして只知識的に認識せ
 らるゝに止まるものならば如何にして其は能く人を動かし人を安じ人を救ふの
 妙用を現し得べきぞ其が對象となるもの、一見純理的純形式的なるの故を以て
 其が權威ある一面を思はざる者は未だ眞に宗教の眞趣を解せざるものと言はざ
 るべからず。

猶一言すべきは宗教はフイテなどの言ふが如く單に神又は神的なるものを識る
 の謂ひには非ず寧ろ信じて歸依するを以て其が本旨となすなり則ち宗教は神を

知ると共に又全く此れに信賴するを以て其が眞義となすなり。

蓋し宗教の主觀的意義を尋ねれば安心立命することにあり而して安心立命は絶
 對的の信賴歸依より來たるを當然とすればなり。

扱て然らば此の如き宗教は人心上抑も如何なる因縁ありて生じ來たれるものな
 るか換言すれば其の心理上に於ける起源如何是れ次ぎに研究を要する問題なり。

第二節 宗教の心理的起源

吾等が天地は常に笑ひ鳥語ふの歡樂境のみを現するものに非らず又悲風暗雨の
 慘憺たる苦境をも示すものなりきのふは爛慢として其美能く滿都の人心を狂せ
 しめたる花も夜半の嵐一度吹きてけふは早くも泥土の中に埋り去らるゝが常な
 り煌々たる一輪の明月時に能く詩人の吟魂を酔はしむと雖も又暫々暗雲の爲め
 に閉ざる紅顔の美少年又永く其美と健康とを樂しむこと能はず忽ちにして白
 髮婆娑たる半死の老翁と化し去るを免れず。
 生ある者には死あり樂ある者には苦あり會ふ者は常に離れ盛なる者又衰ふ。

實に此れ天地の實相なり、わはれ頼み少なく心細き世かな、人此の間に立ちて猶能く無常の感なきを得べしや、昔はギリシヤのヘラクリトス萬有の真相を解いて曰く、萬物は流轉して始終することなし、恰も流水の如し」と、洵に然り、物みなは所謂刹那生滅にして、刻々に或は生じ或は滅しつゝあるなり、一瞬間のものは現在のものに非ず、現在のものは又一瞬後のものに非らざるなり、萬物無常は實に此れ最も見易き天地間の事實なり、而して人ひとたび此の事實を解し然かも此の事實が到底吾人の力を以て如何ともすべからざることを知る時に茲に吾人は自然の絶大なるに對して自己の極めて弱小なることを感じ、やがては一種の恐怖と悲哀と孤獨と岑寂とを感ずるに至る、此等一味の消極的感情は即て宗教の天地に踏み込む秘論とはなるなり。

恐怖悲哀孤獨岑寂等此等消極的なる一類の感情は常に必ずしも彼の無常觀と彼の弱小感との明瞭なる自覺に伴ふとは限らず、時としては一種の漠然たる恐れ、そのことも知らぬ悲しみの情として現はれ來ることあり、孰れを夫れと指し難き一種の不安一種の淋しさとして心の底より湧き來たることあり、何とは無しに助け欲

しく懋め得たく何物にか取り籠りたきやうなる、臆ろにして然かも力強き一種の衝動として感ぜらるゝことあり、而して此れを少しく明瞭に反省すれば無限者戀はしの感又は神欲しさの思ひとも稱すべき性質のものにして、實に人生其物に深く根ざせる不可思議の衝動なり、此れ吾人が宗教に入るの因縁となるものにして所謂宗教的意識たるなり。

要するに此の意識進動の過程は吾人のそを自覺し居ると否とに關はらず、天地自然の強大にして且つ無限なるに對し、自己の弱に有限殆どいふに足らざるを感じ言ひ知らぬ恐怖と悲哀と孤獨と岑寂とを覺ゆるとにあるなり、而して如何にかして此の恐怖、此の不安、此の悲哀、此の寂しさより救ひ出だされし、解脱を得たしと希ひ求むる末は、やがて此に何等か或る無限の力あるもの絶對の權威あるものを尋ね出だし、自己をして全くそれに委せんとするに至る、こゝに於て宗教は始めて生ずるなり、故に宗教は人が神に合せんとする努力より來たるとも言ふを得べし、斯くて先きには全く自己に對するもの自己を苦しむるものとして感ぜられたる天地を以て、總ては我れと一體なるもの、我れも彼れも等しく神の配下に立つ者寧

ろ同じ神の血を分かつてる同胞とさへ感ずるに至る、天地我れに來たれるか我れ天地に入れるか知らず、只我れと彼れとは何時の間にか隔ての籬を徹して互に相抱きたるなり、彼れは最早や我が敵には非ずして温情に充てる兄弟とはなりたるなり、友垣とはなりたるなり、蓋し彼れも我れも孰れは同じ神の分身たることを觀じ得たればなり、此れ則ち宗教なり。

所詮宗教の心理的起源は自己の有限弱小其事より來たる恐怖の感悲哀の情等にありといふを得べし。

第三節 宗教の歴史的起源

宗教は元來人性の本然に深く根ざせるものなるを以て、其の萌芽は已に早く人類の此の世に出現せる當初に於て見られしものならんと考へらる、從つて宗教の歴史的起源を考ふるに當つては勢ひ歴史以前にまで溯らざるべからず、而して歴史以前の宗教の如何なるものなりしかは、歴史以後の事實と傾向とより推して僅かに其の蓋然的憶説を構ふるに過ぎざるのみ。

今日吾人が歴史的知識の達し得る極度は精々五千年乃至六千年位のものに過ぎず、然るに人類學、地質學等の研究によりて學者の吾人に教ふるところに據れば人類の此世に現出せしは少くとも九萬年以前長ければ五十萬年以前にも及ぶべしといふ、今此等の説の確否は兎に角、人類が地球上に現出せしは決して五千年又は六千年といふが如き短少の時間には非ずして、何萬年或は何十萬年の以前にあることは事實なるべし、果して然らば吾人が人間に關する歴史的知識は極めて僅かなるものと言はざるべからず、然らば有史以前の人類が抑も如何なる宗教を有し居たりしかを考へずしては、人類に於ける宗教の起源を眞に明らむるとはいふべからざるなり、茲に於てか人類に於ける最初の宗教は抑も如何なるものなりしかとの一問起る、此れに對しては古來學者の説く所區々として一定せず、されば余は今其等を順次略載して短評を加へ最後に最も穩當なりと認めらるゝものを擧げて此の一問に答へんとす。

(イ) 祖先崇拜説 此の説に依れば凡て宗教の最も原始的なる姿は祖先の靈魂を崇拜するものなりと、此れ英のスペンサー、獨のリッペルト等の主張するところなり、而

催 眠 宗 教 論

してスベンサーの説明するところに依れば太古の人類が或は蛇を拜し、或は熊を拜し、或は鱈魚を拜する等動物の崇拜をなしたるは此等の動物其物に價值を認めたるが故には非ず、祖先が此等の動物の名を以て其名とせる物なりしより、後世に至りて其子孫は過去の事實を忘れて終には動物の名を有せし祖先を崇拜する代りに動物其物を崇拜するに至りしなりと、此の説や極めて巧みなりと雖も、然かも餘り巧みに過ぎて却つて受取り難し、抑も人類の祖先が此等動物の名を有せしことを如何にして證し得べきや、又よしそを證し得たりとするも、彼等の宗教は動物崇拜に非ずして祖先崇拜なりしことを如何にして證し得べきや、何故に彼等は動物の名を以て己れの名と爲すに至れるや、彼等太古の人類が動物の名を以て己れの名とせるは寧ろ彼等が動物を崇拜したりし結果なりとも言ひ得べきにあらずや、又動物崇拜、木石崇拜、天然崇拜等の種々なる宗教が祖先崇拜と同時に存在せることは寧ろ事實にして、然かも其の孰れが最も原始的のものなるかは俄かに斷じ難き趣きあるに非らずや。

よし亦スベンサーが所説の如く此等の野蠻人種は元來動物崇拜者には非ずして、

宗 教 の 歴 史 的 起 源

祖先崇拜者なりしとするも未だ直ちに祖先崇拜を以て人類最古の宗教なりしとは斷ずべからず、何となれば元來祖先崇拜は肉體と精神との別物なることを豫想し、精神は肉體を離れて存在し得ることを豫想し、人の靈魂は肉體の消滅後にも存し得ることを豫想し、進んで斯の如き祖先の靈魂は又能く其の子孫に或は祝福を與へ、或は禍害を加へ得ることを豫想するにあらずんば存立し難きものにして此の如く複雑にして思考力に富む宗教が歴史以前の人類間に行はれたりとは、到底考へ得べからざるところなればなり。

故に祖先崇拜教の歴史上極めて太古に屬する人類の間に行はれたりし事實は此れを否むべからずと雖も、以て人類最古の宗教となすは當を得たるものといふべからず。

(ロ) 庶物崇拜説 此れ英のテラー、蘭のテイールの提出せる所にして其説に曰く、人類最古の宗教は庶物崇拜、即ち拜物教にして石塊、木片、貝殻、羽莖、毛髮等を崇拜せるものなりと、此の説一見最もらしく見ゆと雖も、精しく考ふる時は此れには其間獨複雑なる消息を含み居ることに氣付くべく、従つて未だ最古の宗教と見る能はざ

るを知るべし、今日崇拝教を奉ずる野蠻人に就いて見るに、彼等は決して生物と死物とを解し得ざるが如き曖昧なるものには非ず、必ず此の區別を了解し居るものならん、此れを了解し居りて尙ほ且つ此れを崇拝するは死物其物を拜むには非ずして、死物の中に宿れりと思はるゝ一種不可思議の勢力を拜むものなるべし、此の一種の不可思議なる勢力は恰も此れ人間の靈魂の如きものにして、靈魂が肉體の中に宿るが如く、此の勢力も亦無機體の中に宿ると信ぜらるゝなり、故に拜物教は其實拜靈教の一種たるに過ぎず、唯純粹なる拜靈教即ち物體に關係なき靈魂を崇拝するものとは聊か異なりて、靈魂の潛み居る物體其物に重きを置くのみ。

斯の如き拜物教の決して簡單なるものに非ざることは、既に物體と其中に潜在する靈魂とを區別し居ることにて明かならん、拜物教に於ては、常に此の區別を爲すに止まらず、彼等は崇拝物即ち靈魂を祈禱供物等によりて左右し、以て自己の意志に従はしめ得べしとの信仰を有するなり、此れ豈然かく單純のことならんや、見よ、今日相當に文明なる國民の間に、此の宗教が如何に盛んなるかを、遺物崇拝の如き護符崇拝の如き、石塊の崇拝の如き、吾人の常に目撃する所にあらざるや、此れを以

て人類最初の宗教と爲すは不當なりと言はざるべからず。

(一) 無限崇拝説 此の説に曰く、人類最古の宗教は祖先崇拝に非らず、又庶物崇拝にも非ず、有限なる人間が無限を知るにあり、人智は有限のものなるが故に、進歩するに従つて自己の智力の狭小なるを悟り、知らるべきものゝ無限なることを悟るに至る、始めは其の知るところ萬物の感覺的現象のみなるが、進んでは常には見え、ずして時に現はるゝ現象例へば、風雨に電雷等の存在を認め得るに至り、更に進んでは、嘗て吾人の耳目に觸れざる無限なる神力の存在を認めて、此れを崇拝するに至ると、此れ有名なるマックスミュラーの稱ふるところなりとす。

今此の説に就きて考ふるに、其は未だ以て宗教の起源の満足なる解答とは爲すべからざるどころあり、無限崇拝てふことは、氏の言ふ所に照しても明かなるが如く、人類が相當の程度迄其の思考を進め、我が智の有限にして極めて狭小なることを自覺し、夫れに對して天地萬有の無限絶大、到底人智の能く達し得るところにあらざるを了解し、以て其の無限の中に或る偉大なる神力の潛めることを感じて、然る後に起り來たるものなれば、少く共人類が或程度までの進歩をなし、相當の自覺反

省を経たる後に非ざれば能く至り得るところに非ざるなり、よし又初めより彼等野蠻人は無限なるものを知り得たりとするも、無限を知ることが決して宗教心喚起の重なる縁には非ず、宗教は單に天地の無限なることを知るより生起するに非ずして無限を感じ且つ其中に偉大なる力を感じて一種の恐怖を覺ゆることより生じ来るなり、要するに太古朦昧なる人種に取りては常に無限を知るてふ事の高尚に過ぐるに止まらず、よし此れを知り得たればとて其の知識丈けにては到程一種の宗教を形成すること能はず、そは只僅かに何等か宗教の心理的一線となるに過ぎざるのみ。

(ニ)トテム崇拝説 此は英のロバートソン、スミスが「セミチック」人種の宗教の起源を論じて動物崇拝にありとなし更に進んで全人類の宗教的起源又茲にありとなせるところにして、此は或る人種が或る一種の動物又は植物を選び殊に其の種族の本尊として此れに神事するものにして、此く選ばれたる一類の動物は此れを擇みたる種族一般の崇拜物即ち「トテム」となること恰も我國に於て氏神の氏子に於けるが如し崇拜者は一種族全體にして、其の「トテム」を畏敬す、又崇拜物即ち「トテ

ムは己れの種族全體を保護するなり。

此の「トテム」崇拝教は現に今日野蠻人種の間盛なるのみならず、古代に於ては實に凡ての人種の間に行はれし所のものなり、我國に於て蛇を祭りて「ぬし」とする神社の多き、又狐崇拜の多きこと等又此れに屬するものならん、殊に「セミチック」人種の間には、此の宗教の行はれざるどころ無かりしなり、さればロバート、スミス氏は「セミチック」人種の宗教の起源を以て此の「トテム」崇拝にありとなし、進では世界の宗教の起源を以て又茲にありとなすに至れるなり。

今此の説を見るに其の性質に於て又歴史的事實に徴して、前三説に比し多少優るところあるが如しと雖も、然かも凡て前三崇拜が此れより出で来れりとなすこと先づ第一困難なりと思はる、祖先崇拜が如何にして此の動物崇拜より出で来れることを證すべきか、又庶物崇拜無限崇拜等が如何にして此の動物崇拜より出で来れることを證すべきか、此れ甚だ困難なることにして、寧ろ動物崇拜も又前三者と併存せるものにして、而して共に均しく何等か更に原始的なる他の宗教より進化分離し来れるものと見るの却つて考へ易きに非ずや、加之此の宗教も又

催 眠 宗 教 論

其間に種々複雑なる消息を含み、到底最古最初の宗教たるに適せず。又次に説かんとする天然崇拜なるものを説明し得ず、却つてそは天然崇拜に依りて説明せらるゝの位置にあり、故に取る能はず。

(ホ)天然崇拜説 以上掲ぐるところの諸説が其孰れも宗教の起源を説きて未だ充分ならざるは其の罪主として人類出現の時代と人類に關する歴史的知識の最古の時代との間に少くとも何萬年長ければ何十萬年にも渡る長日月の横はること、を閑却せる一事にあり、若し人類は吾人が歴史的知識の到達し得る範圍に於てのみ宗教を有し、夫れ以前には宗教を有せざりきと見れば、兎に角苟も宗教は人性に必然のものにして、人類の現出と同時に存在せるものと考ふる以上は其の最も原始的なる宗教が極めて單純にして、且つ上擧の諸宗教の起源となり得る性質のものたるべきは當然のことなり、然らば其の如き宗教を以て何とか爲す、曰く天然崇拜即ち此れなり。

天然崇拜とは佛のレゾイユ、獨のフライデル等の所謂、ナチュリヅムなるものにして、此は天然物全體即ち萬有を一括して此れを崇拜するといふ義にはあらず、又萬

宗 教 の 歴 史 的 起 源

有の中に存在する勢力を崇拜するといふ義にもあらず、人類が外界の或る現象を其儘に崇拜するの謂にして決して人類が現象と本體とを區別し、又物質と勢力とを區別し得るに至れる時代のことには非ず、又天然の現象を一括して之れを萬有と稱し得るが如き抽象作用の可能となりし時代のことにもあらず、彼等太古の人民にありては未だ己れの身體と靈魂との區別を知らず、物と心との區別を知らざりしこと恰も小兒の如くなりしならん、而して只彼等の解し得たりし物の動と不動とのみなりしならん、而して日月火水風雲電雷の如く、或は忽ちにして起り、忽ちにして滅し、或は堂々として進み沈々として隠れ去る等の働きを以て己れに似て然かも己れ以上の力と働きとを持てる恐ろしきもの畏敬すべきものと思ひしならん、斯くて此の情に催せられて何とはなしに天然物を崇拜せしならん、斯の如く極めて單純なる天然崇拜こそ實に人類が宗教の起源をなすものなるべし、而して肉體と精神との區別を解せざりし此の状態より漸く進みてこの區別を認むるに至りては茲に靈魂崇拜に進み、やがて夫れよりして或は祖先崇拜、或は庶物崇拜、或はトテム崇拜等に進みしものならん、此れ吾人が今日兒童の心理發達等に

徴しても考へ得らるゝことにして極めて正當の説と信ぜらる故に余は他の諸説を斥けて此の説に従ふものなり。

第四節 宗教の種類

宗教の種類を區別するには其の標準種々ありて或は言語を標準とし、或は眞偽を標準とし、或は天啓を標準とするなど區々一定せず。然れども余は宗教進化の階段に依りて此れを分類するを以て最も當を得たるものと信ずるが故に今は此の方法に従はんとす。

(イ) 天然崇拜教 此れは前にも説ける如く、人物に於て最も初歩なるものにして、日月星辰高山大川風雲電雷等の如き天然物に對してその勢力の偉大なるに感じ、其の活動の不思議なるに驚きて、是等のもの其儘を直ちに神として崇拜する宗教なり。我國に於て愚夫愚婦が日出を拜し、或は月を拜する如き又古代の埃及人、印度人等がナイル河、或はインダス河等を崇拜したるが如き先づ此れに屬するものなり。先きにも説けるが如く、此の期の宗教は人類が未だ靈肉の區別を認めざりし時

代のものなるが彼等が一步其の愚想を進めて此の區別を解するに至れば此處に、(ロ) 靈魂崇拜教 即ちスピリチズムの時代に入る。此れは前述の如く、形體以外何等か一種精神的のものありて、そは目に見耳に聴くべからずと雖も、兎に角奇妙なる不可思議力を有して、人間の吉凶禍福を支配するものと信じて、此れを崇拜し、此れを供養するものなり。次には寧ろこの靈魂崇拜の一種とも見らるべき。

(ハ) 祖先崇拜教 起る此は靈魂崇拜を單に祖先の靈魂に限りたるものに過ぎず、即ち祖先の靈魂は其の子孫を保護し、恩恵を垂るゝものと信じて此れを崇拜するものなり。

(ニ) 庶物崇拜教 庶物崇拜は亦野蠻人種の間に於て靈魂崇拜、祖先崇拜など、等しく行はるゝものにして、重に亞非利加の蠻人黒奴中に行はる、即ち石塊、木片、或は鳥の羽の美麗なるもの、外人が破船などして残し行ける錨などに一種の靈力を認め、それに病氣平癒の力、又は惡魔を拂ふ呪力ありと信じて、此れを崇拜するものなり。我が國に於て所謂御符なるものに一種の呪力を認めて之れを念ずるが如きは又此の一種に外ならず。

(ホ)・テム・崇・拜・教 此は亞米利加印度人やアイヌ人等の間に今日猶行はるゝ所に於て、一種の動物稀れには植物と自己の種族との間に或一定の血族關係を認めてそれよりして其の動物又は植物を崇拜するものなり、即ち或る一種族の祖先は熊なり、狼なり、兎に角一種の動物なりしとの考よりして子孫に至りても猶其の熊亦は狼を崇め神として祭るものなり。

右數種のもは孰れも劣等なる人類、未開なる人類の間に行はるゝ宗教なるが故に此等を稱して劣等人文教と呼ぶ、此れに對して人類の高等に進みたる少く共半開以上に達したる國民の間に行はれ、其宗教の性質の複雑にして、且つ一層道德的、合理的に至れるものを名づけて高等人文教といふ、其の進化の程度によりて此れを凡そ三種類に分つべし、一、神話的、二、律法的、三、倫理的、此れなり、猶ほ茲に一言すべきは謂所劣等人文教にありては其の崇拜の對象となるものゝ性質極めて曖昧にして劃然たらず、即ち神格不確立なりと雖ども、高等人文教に於ては假例へば佛教に於ける眞如亦は如來彌陀等の如く、基督教に於けるゴッド等の如く、崇拜の對象甚だ明瞭となり、神格確立せらるゝこと此れなり、扱て先づ神話的宗教より略述せん。

(一) 神話的宗教 人文漸く進て少しく思考力發達するに至れば神話なるものを形成するに至る、此は世界何れの國民に於ても見るところにして、殊に著名なるは希臘古代の宗教なりとす、ホーマーの二大雄篇と稱せらるゝ「イリアッド」「オデッセイ」の中に描かれたる諸神の物語は蓋し希臘當時の神話に其材を取りたるものなり、ギリシヤの神話は多神教大抵然りの形式を取りたるものにして、其の最も純なるもの、即ち純多神教と名づけらるゝものなり、我が國に於ても彼の古事記に叙せられたる神代の物語は又此れ一種の神話に屬す、又印度古代の宗教即ち吠陀の宗教も希臘に於けると等しく一種の神話的宗教にして、且つ多神なるが、此れとは少しく其趣きを異にし、或は名けて單一神教又は交替神教と稱せらるゝものなり、即ち吠陀の宗教に於てはインドラ、アグニ、アラス等神は二三に止まらずと雖も、信者は時によみて其の一を擇びて崇拜し、其間は全く他の神あることを忘れて一向にそれのみ歸依すといふが如く、神は多くありながら一時に崇拜する神は必ず一に限るてふ性質を有するものなり、由て此の名あるなり、次にイスラエルの宗教又微妙ながらに神話的の分子を含む、舊約聖書の冒頭に見えたる、有名なる創世記物語の如き

は後世パピロニア地方の宗教に影響せられて成りたるものなるが、又偉大なる神の一つなり、而して古代イスラエル人の宗教は印度の單一神教を一層嚴密にせるが如きものにして、學者此れを呼んで拜一神教といふ、即ちイスラエルてふ國民の崇拜する神は唯エホバ一神に限り、他の國民には如何なる神ありとも夫れに關はらず、イスラエル國民は其れと特殊の關係を有する一神唯エホバにだに事ふれば足れり、其れ以外の神を崇拜すべきに非ずとなすものなり、故に又此れを呼んで國民的唯神教ともいふ、純粹の唯一神教、即ち凡ての人類が崇拜すべき神は唯一なりと唱ふる基督教は蓋し此れより進化し來れるものなり。

(ト) 律法的宗教 以上の如き神話時代を過ぎて次ぎに來たるものは律法的宗教なり、此れは種々の嚴肅にして、且つ煩瑣なる宗教上の法則、即ち戒律なるものを設定し、寸分も違ふことなく此れに従ふことを以て宗教なりとなすものにして、猶太教に於けるパリサイ、サドカイ教徒の如き、印度に於ける波羅門教の如き、亞刺比亞の回教の如き此の適例なり、其の設定せる戒律は神より與へられたるものとなし、其の精神本義を忘れて漫りに形式の些末に盲從するの弊は此の種の宗教の常に陥

るところなり、蓋し此の宗教に於ては其の神法即ち戒律は全く他より與へられたるもの、換言すれば純他力的のものなるが故に、自然其が外容の修飾に走りて精神の在る所を忘るゝは數の免れ難きところとす、勿論此の時代の宗教に於て道德を重ずることは事實なりと雖も、其の道德の嚴守は自律的に自己の内部より湧き來れるものに非ずして、唯一向に他より與へられたる法則に従ふことなれば、未だ道德の極致に達せるものといふ能はず、眞に道德的なる宗教は自律的のものならざるべからざるなり。

(チ) 倫理的宗教 律法的の傾向を一步進むれば宗教を自律的の位に高まり心の清きものは福なり(馬太傳五)と説き、自淨其意、是諸佛教(法句經)と説く佛基二教の如きものとなる、此れ純乎たる自律的道德の宗教にして、所謂倫理的宗教の極致に達せるものなり、此等の宗教が倫理的と名づけらるゝは、宗教が其儘倫理なりといふ意には非ず、純自律的に發達せる道德の形式を以て其の一面を成せることをいふなり、元來道德は何等かの權威に依りて他より與へられたる法則なるが故に、此れに従ふといふが如き他律的態度にては未だ至れるものといふを得ず、自己が自己の

理想、眞我の要求に依りて自己自身を決定するといふ自律的、道德の境に至りて始めて完しといふを得べきなり、されば宗敎に於ても只々戒律といふが如きものに遠はざらんことを此れ恐るの態度は未だし、神を愛し神を敬するの念よりして其の心を清く美はしうし自ら其の行ひの道に適ふに至りて始めて純なりといふべし、佛敎及び基督敎は孰れも多くの宗派を有すと雖も、此の點に於ては凡て一致せるなり、以て最高の進化をなせるものといふべし。

第五節 宗敎の發達

宗敎は元來人心を土壘として存立するものなるが故に、人の思想の發達に伴ふて、宗敎にも又發達のゐること勿論なり、即ち個人に於ても、社會に於ても其が思想の發達と共に宗敎は發達す、而して今は社會思想の發達に伴ふて宗敎が如何に進化した行くかを見んと欲す、此れに付きては、中世の神學者ベルナルズに宗敎意識發展の四階段の説あり、今は便宜の爲め此れに従ふべし、其説に曰く、第一、人は己れの爲に己れを愛す、第二、己れの爲に神を愛す、第三、神の爲に神を愛す、第四、神の爲に己れ

を愛すと、其中第一の己の爲に己れを愛するは此れ全々利己主義にして、何等宗敎に關係なきを以て、こゝに言ふの要なし、第二階段なる己れの爲に神を愛すといふは、宗敎意識發達の上より見れば恰も劣等人文敎及び神話的宗敎の時代に相當す、即ち此の時代の宗敎にありては、信者は唯自己の欲望するところを叶へんが爲の方便として神を拜するなり、神を祭り、神に供饗を捧ぐるは、唯其の報酬として自己の求むる御利益を與へられんが爲なり、極端に言へば彼等は神を拜ひに非ずして欲を拜ひなり、故に彼等は神に對して所^か有る媚^びを呈し、御機嫌を取りて、而かも自己の望みの達せられざる時に當つては、彼等は或は神を罵り、或は神體を毀ちて毫も憚る所あらざるなり、蓋し彼等に取りては神は只此れ自己の欲望を叶へんが爲の小使に過ぎざればなり、彼の娼妓輩が稻荷様に祈願して客の多からんことを求め、盜賊等の不動尊を念じて獲物の多からんことを望むが如きは最もよく此の種の宗敎の本性を暴露せるものといふべし、此れ豈進歩せる宗敎ならんや。

此の状態より一步を進むれば即ち第三の階段にして神の爲に神を愛すに至る律法的宗敎は則ち此れなり、此の宗敎にありては信者は唯一向専念神命之れ従ふの

態度にして自己てふものなきなり、自己は唯々神命律法を嚴守する機械の如き位置に立つなり、此の宗教に於ては戒律に従ふは唯其れが神の命なるが故に従ふに、其以外何等の理由あるに非ず、第二階段に於けるが如く何等か自己の爲にするところありて、戒律を守るには非らざるなり、即ち此の期に於ける信者に取りては、念頭たゞ神のみありて自己なるものなし、自我は絶対的に抑壓せられ放鄭せられて、遂も其が活動の餘地を止めざるなり、此れ宗教生活に入るもの、必ず一たびは經ざるべからざるにして、頗る意義深きものなりと雖も、未だ決して宗教の極致とはいふべからず、且つ此の宗教の極めて陥り易き弊は我れに於て何等の自覺もなく唯無暗に戒律の預末形式の枝葉に拘泥して偏僻固陋に流れ、融通の利かぬ状態に陥ること此れなり、此れを學校生活に譬ふれば恰も小學校乃至中學校の時代にして、生徒は一重に受勸の位置にのみ立ちて、徹頭徹尾教師の言に拘泥し、未だ自ら進んで考究するの態度に出でざるが如し、故に更に一步を進むべく、又進むべき餘地あるなり。

而してそれはベルナルツが所謂第四階段の境地とす、余は前段に於て自己を全々放

鄭してたゞ神の爲に神を愛するの態度を以て、宗教上深き意義あること、言ひたるが其故如何といふに、元來宗教は天地の絶大無限を感じ、それに對して更に自己の有限弱小を感じて以て、其れより來る不安恐怖の状態より救濟せられんとを切に希求する結果、自己以上の權威を有するもの、即ち神を呼び出して此れに信賴し委託することより成るものなれば、先づ小我たる自己を一度は放棄して、全く神の懷ろに没入するを必要となすなり、自我放棄てふことは、宗教に入るの第一關門なり、然りそは實に第一關門なりと雖も、未だ其の奥殿には非らず、則ち一たび自己を神に没したるものは、やがて神に於て再び蘇へらざるべからず、神の爲に一單放棄せられたる自我は、再び新らしき自我、即ち所謂新人となりて、神より蘇らざるべからず、而して神より得たる新らしき生命を以て、神の爲に働かざるべからず、又神の爲に自己を愛せざるべからず、ポーロが所謂我は神の中に働き、生き、而して在るものなりとの信仰の下に、今日一日の義務をも、又如何なる賤しき業をも、神より與へられたる天職なりとの自覺を以て、力の限り働かざるべからず、我が在るは天功を輔けんが爲なりとの覺悟を以て、自暴せず、自棄せず、全力を擧げて力めざる

べからず、此れ宗教生活の極致なり、こゝに至れば即ち神の爲に自己を愛するの境地にして、ベルナルツが以て第四の階段となせるところなり、而して佛教や基督教は正に此の段階に立つものといふべし、道元禪師此の段の宗教意識を言つて曰く、日々の生命を等閑にせず、私に費さざらん、と行持するなり、——一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の他生をも度取すべきなり、此の一日の身命は貴ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり、此の行持めらん、身心自らも愛すべし、自らも敬ふべし。

とわはれ、掬すべき言なる哉、宗教意識は茲に至つて其の最高潮に達せるを見るなり。

第六節 宗教と迷信

宗教と迷信とが彼のペーコンを始めとして、其の他の宗教學者等がいふ如く、全々其性質を異にせるものなるか否やは蓋し疑問なり、余を以てするに、迷信と宗教とは凡ての場合に於て全く相異りとは言ひ得ざるが如し、殊に宗教が未だ發達せざ

る階段にありては、殆ど其の全部が迷信に近き事さへ往々にして、此れ有り、否吾人が今日開明せる思想を標準として、古代の宗教又は野蠻人の宗教を窺ふ時、其の迷信に屬せざるもの果して幾何ありや、吾人を以て見るに、迷信の第一要素は知的判断の誤謬にあり、何人と雖も、此の一事は否まざるべし、果して然らば、木石に鬼力を認め、或は下等動物に威靈を認むるが如き、劣等人文教は、此れ一種の迷信に非ずして、何ぞ、或は生殖器を崇拜し、或は幣束を祭るが如き、今日愚夫愚婦の間に見らるゝ宗教は、此れ一種の迷信に非ずして、何ぞ、強いて宗教と迷信との區別を爲さんが爲に、此等は迷信なれども、宗教には非ずと言はんか、此れ強いて事實を曲ぐるものなり、此等是一種の宗教にして、然かも同時に迷信(少く共其の大部分が)なることは、掩ふべからざる事實に非ずや、然れ共誤解すること勿れ、余は此等を以て全々迷信となし、毫も夫れ以上の意義なしといふものには非ず、そは迷信なると同時に又、其れ以上に一種の宗教的眞理を藏し居ることは、余の疑はざるところなり、たゞ余は宗教と迷信とを峻別することの事實に合せざるを唱ふるのみ、然れども、宗教の理想的状态より言へば、迷信は決して宗教に屬すべきものにわらず、即ち宗教は迷信と

離れては立ち得ざるが如きものに非ず、否却て宗教の病的状態にして、寧ろそれを偽つくるものなり、宗教の宗教たる本質と迷信とは明かに其の性質を異にするものにして、人性深根の事實なり、故に宗教と迷信とは常に纏綿錯綜して存するを見る。と雖も宗教即迷信、迷信即宗教には非らざるを知るべし、然らば迷信とは抑も如何なるものぞ。

前にも一言せる如く迷信は其れ自身の姿より見れば一種の誤謬的判斷なり、其の文字上にも表はれ居る如く、眞ならざるものを以て眞なりと錯誤して信ずることなり、果して然らば科學者が科學上誤まれる説を抱き、政治家が政治上の誤まれる見解を抱くが如きをも迷信とは言ふべきか、此れを實際に徴するに斯かるものを稱して一般に迷信とは呼ばざるが如し、然らば迷信が迷信と呼ばれるには知的判斷の誤謬以外に抑も如何なることを以て其の條件とはするか、學者或は曰く、迷信とは人生に實際的影響を及ぼすが如き性質を有する所の誤まれる知識なりと、此の説果して當を得たるものなりや、若し迷信にして斯の如きものとせば政治上或は教育上或は道德上等の人生に實際的結果を及ぼす誤まれる見解は此れを迷信

なりと言はざるべからず、されど此は事實と反す、余を以て此れを見るに迷信の迷信たるはそが人生に對して實際的影響を及ぼすと否とに關はずたゞ宗教上の不合理なる信仰たるにあるなり、誤まれる宗教的信仰、此れ迷信なり、故に余は其を定義して曰く、迷信とは不合理なる宗教的信仰をいふと、見るべし、迷信と宗教とは全々此れを分離し得べきものに非らずして、實は前者が唯後者の病態たるに過ぎざることを、されど宗教の本領は迷信以上のものにして、それとは性質を異にす、然らば謂ふ所の宗教の本領とは何ぞ。

そは、他^〇に^〇非^〇ず^〇、神^〇の^〇直^〇覺^〇なり、神^〇の^〇信^〇頼^〇なり、神^〇に^〇於^〇て^〇生^〇き^〇、神^〇の^〇方^〇に^〇よ^〇り^〇て^〇働^〇き^〇、神^〇の^〇恵^〇みに^〇依^〇り^〇て^〇安^〇立^〇す^〇ることなり、此れ決して迷信には非ず、太古の人類が風雲電雷を崇拜したるも、そを風雲電雷として崇拜したるには非ず、神と信じて崇拜したるなり、其等を以て神と信じたるも迷信なり、然れども神と信ずるところに對して一念の誠を捧ぐるは、此れ迷信にあらずして、堂々たる宗教上の眞理なり、神を信じ崇め、神に頼り、神に安ずるは、決して不合理のことにも不稽のことにも非ずして、實に人性最深奥の事實會解分別以上の沙汰なり、嚴然たる宗教的眞理なり、哲學も科學

も能く抹削し、拂拭する能はざる人生の權威ある事實なり、蓋し此等の宗教的眞理を人心の理知的一面とは甚だ性質を殊にする情意的半面に其の脚を立つるものにして謂はゞ人性の裏面に本づく不思議超批判の事象なり、然かして此は全々理知と没交渉のものなるが故にそれと衝突することもなく、矛盾することも無きものなり、斯かる宗教的眞理は實に宗教そのもの、本質にして、又凡ての宗教の根底たり、而して此れと迷信とは迥然として其の質を異にす。

右の如く迷信は宗教其物の本質にも非ずと雖も、然かも凡ての宗教の極めて陥り易き弊にして今日如何なる種類の宗教と雖も全く迷信の分子を含まざるは甚だ稀れなり、事實としての宗教は遺憾ながら迷信の殆ど常に纏綿し居るを見る、こゝに於て吾人も宗教其物の爲に、又人生の爲に極力迷信の剷除に力めざるべからず、然らば吾等は何を標準として迷信の迷信なることを認め、此れが剷除に力むべき、曰く道德と學術とを標準として此れを爲すべきのみ、宗教進化の第一條件は迷信の驅除にして、而してそは又宗教の倫理化及び論理化を意味す、此れに由りて宗教は始めて迷信に陥るの弊を免れ、且ついよゝゝ其の意義價值を高め行きて以て能

く其の天職を全うするに至るべきなり、但し倫理や論理以外宗教の本領あることは勿論にしてそは自づから次章の問題となるべし。

第八章 宗教と學術

第一節 宗教と哲學

宗教と哲學とは何れも其性質廣漠にして且つ多種多端なるが故に、二者の關係に就きて甚だ明瞭なる論斷をなすは難し、されど二者又自から區別無きにあらざるを以つて左に此れを略陳せん。

哲學の目的とするところは天地人生の意義究極を解釋し、以て人をして安心を得せしむるにあるものなるが宗教に於ても又然り、如何なる宗教と雖も苟も相當の進化を爲せるものありては、哲學に於けると均しく、何等かの形に於て、宇宙問題及人生問題の解釋を試みざるは非ず、彼の神活的宗教に見る天地開闢説の如きは實に當時の人類が抱懐せる世界觀を表はせるものたるなり、而して宗教が最後の安心を求むるが如く、哲學に於ても亦然かり、哲學は直接には萬有の合理的解釋を

催 眠 宗 教 論

要むと雖も然かも此れを求むるは蓋し其の解釋を得て以て究竟の安心を期圖するに外ならず、斯く見る時は哲學も宗教も全々其の目的を一にすといふを得べし猶ほ哲學と宗教とは其の起源の上より考ふるも共に均しく自然に對する恐怖長敬怪奇等の感情より生起し來たれりともいふべく、殆ど擇ぶ所なし、此れ又二者の一致するところなり。

次に此れを心理上より見んか、哲學は一面知的なりと雖も其究竟の目的が安心立命にかゝり來るによりても略々察せらるゝ如く、又情意の要求に待つ所多し、即ちそは知情意三者の共働を要求するものあり、宗教に於ても又然り、其は勿論情意的なりと雖も、一面に於ては世界觀人生觀の建設をも求むるが故に決して知を離れては存立する能はず此點より考ふるも二者は又一致するなり、然らば宗教と哲學とは遂に何等の點に於ても相異するところ無きかといふに決して然らず、先づ第一に二者は其の主能を異にす、即ち宗教も勿論知情意三者の共働を待つと雖も其の主とするところは情意の活動にあり、哲學に於ては此れに反して、情意よりも寧ろ知を主とす、從つて哲學にありては認識を主とし、信に重きを置かず、力めて空

宗 教 と 哲 學

想を排す、宗教にありては信を第一とし認識に重きを置かず空想も亦此れを斥けず前者は抽象的理論的にして、後者は具體的徽號的なり、前者は公明平易を尊び後者は秘神幽玄に陥る。

第二に目的の上より見るも哲學と宗教とは少しく其の趣きを異にす、哲學の目的も宗教と同じく歸するところは安心立命にありと雖も此は寧ろ其の間接の目的にして直接には正當なる認識を期圖す、宗教に於ては此れに反して、安心が直ちに其の目的なり、從つて宗教は權威に對する信頼を骨子となし、哲學は無權威的思索を骨子となす、前者は他力的壓迫的社會的にして後者は自力的個人的批評的なり、從て彼れは保守的退嬰的にして、後者は進歩的破壊的なり。

第三に兩者は社會に及ぼす影響の範圍と勢力とを異にす、哲學は其の本領研究と思索とにあるが故に知識の發達せる學者の手にのみ與かられ、一般社會の有となること難し、即ち一部の階級的なり、宗教は其の本領を信仰に有し、必ずしも研究と思索とを待たざるが故に、凡てのものに通じ一般社會の有となるを得、即ち普通の平等的なり、此れ其が影響を及ぼす範圍の上の差なるが其の勢力の上より見るも

哲學は知的にして且つ理解的なるが故に人の日常生活の上に力を及ぼし、此れを分配すること小なれども、宗教は情意的にして且つ信仰的なるが故に人の日常生活の上に力を與へ、此れを支配すること甚だ大なるの差あり、斯の如く宗教は社會に及ぼす影響の範圍と勢力とに於て遙かに哲學の上にあるが故に宗教はよく社會を動かし歴史を動かす大勢力を有するなり、試みに泰西の歴史を繙き見よ、羅馬に於ける基督教の運動の如き、ルイテルが宗教改革の如き、英國に於けるピニウクタン（Puritans）の運動の如き最も吾人の注意を要する大事件は孰れも宗教に基けるもの、非らずや、此の點より見れば哲學の如きは殆ど言ふに足らざるなり。

以上の如く哲學及宗教の二者は其の根本に於ては一致するところ極めて多しと雖も又種々なる方面に於て相異なるところ少なからず、されど此の二者は分け上る麓の道こそは異なれ、共に同じ高根の月を見んとするものなれば互に相待ち相助けて進むべきなり。

第二節 宗教と科學

科學と宗教とは甚だ深き關係を有するものならざるが如しと雖も、同じく此れ人心の産物にして且つ俱に何等かの形に於て天地人生の意義を語らんとするものなれば、又全々隔絶せるものには非ず、否事實に於て近世科學の發達が陰に宗教に對して種々の影響を與へつゝあるは吾人の見るところなり、今二者の關係を見んとする豈夫れ無用のことならんや。

學者或は説をなして曰く科學的認識の進歩によりて信仰の無價値なることは證せられたり、有神論の如きは全く一の迷信的空想に過ぎず、神學は世界經過の善惡に關係せざる盲目的なる勢力によりて規定せらるゝことを證明せりと、換言すれば科學的認識は宗教的直覺の基礎を破壊せりと、大に誤まれるかな、科學は或は天然崇拜の如き、動物崇拜の如き神話的多神教の如き又は人間と均しき個體としての人格神の存在を信ずる或る種の宗教の如きが全く不稽の妄想迷信に過ぎざること、は此れを證明したるべし、若し宗教は直ちに斯の如きものにして、其れ以上の意義を含まざるものとせば、それ最早科學の爲に破壊せられ終んぬといふを得べし、然れども幸にして宗教は斯かる淺薄卑近のものには非ず、其の根底は深く科學

の達し得ざるところにあり、科學の破壊し得たるところは僅かにそが迷信的部分のみ、何が故に然るか。

科學は極めて進歩せり、物質の性質と作用とは甚だ明かになれり、生物の起源と發達の過程も甚だ明かになれり、凡てが明かになれり、されど科學は宇宙とは何ぞや、其の本質は如何の問題に就いて抑も吾人に何事をか教へたる、吾人は未だ科學よりして此等に對する何等の解答をも聞かざるなり、否事實は却つて此れに反し科學の進歩は益々宇宙の神秘を深からしめ、其の意義を不明ならしめたるに非らずや、科學は望遠鏡的觀察と顯微鏡的觀察とに依りていよいよ天地の高大と微妙とを吾人に知らしめたるのみに非ずや、實に科學的研究の進歩は吾等に教ふるに天地の意味を以てせずして、其の不可思議を以てしたるのみ、驚嘆し畏敬すべきを以てしたるのみ、而して此の如き天地の廣大無限に對する驚嘆畏敬の感情はやがて此れ宗教の基礎、宗教の中樞たるなり、斯く觀じ來れば科學の進歩は宗教を破壊せずして却つて益々其の基礎を固からしめたるに非らずや、科學者が科學の進歩に依りて宗教の破壊を期待するは恰も馬に鞭打つて然かもその止まることを想ふ

如し、誤まれるかな。

然るに科學を以て宗教の領域を侵害するものとなし、宗教の存立の爲に全々科學を排斥せんとするものあり、實にや吾人は科學の進歩に依りて幾多宗教上の教義の破壊せられ行くを睹る、此れ事實なり、されど其の破壊せられ行くは旨として劣等人文教乃至餘他の迷信的部分のみ、迷信的部分の段々に破壊せられ行くは人智の發達に伴ふ必然の結果にして、此れ寧ろ宗教の爲にも又社會の爲にも甚だ望ましきことに非ずや、此のことあるが故に宗教は益々其の價值を高め純より純に進み行くに非らずや、迷信の打破は決して宗教其物の打破には非ず、宗教の根本は迷信以上又科學以上のものなり、此の理を悟らずして、寧ろ親しむべき科學を以て仇敵視するは誤まれるものと言はざるを得ず。

抑も宗教と科學との争點は其の根底を人心の不易なる矛盾性に有す、宗教の主能は感情にして、信仰を以て立ち、科學の主能は智性にして、認識に於て成る、而して此の二者は孰れも人間本然の要求に基づくもの共に堂々たる人性の事實なり、故に此の二者の争ひを以て人心内部の矛盾性に歸するの外なきなり、此の如く二者は

各々其の根底を相異なる人性の両面に有するものなるが故に其の關係は他くま
 で併行的なるべく決して一が他を侵し得べきものに非ず。故に科學はたとへ如何
 ばかり發達を遂げたりとも決して宗教の境地に踏み入ると能はず。宗教の境地は
 科學の到底達し得るところに非らざるなり。所謂科學の達し得ざる宗教の境地と
 は何ぞ、曰く無限之れなり。科學はその研究を進むること益々深くして此の無限に
 遠ざかること愈々遠し、無限に對する希望は人心と離るべからざる深因縁を有す
 るにもかゝらず、科學は遂に此の重要な人性の希望を満足せしむること能は
 ざるなり。此れ宗教の存立する所以にして科學の如何ともすべからざるところな
 り。

科學者は兎もすれば宗教或は哲學の本領とするところを呼んで空想なり、架空の
 説なり、豫想なり、假定なりとして排せんとす。然かも彼等は宗教や哲學の言ふとこ
 ろを否定することがやがて其れ自らの基礎を敗るものにして、直ちにその自殺
 なることに氣付かざるなり。彼等は宗教或は哲學の與かる形而上的問題が實は科
 學の根底たる假定のあるところなるを悟らざるなり。若し宗教や哲學に於て究む

るところにして全く一片の空想に過ぎずとせば、而して科學の假定として採ると
 ころがこゝにありとせば斯かる假定の上に築かれたる科學は終に其の根基を失
 ひて瓦解するの運命に相遇せざるを得ざるなり。

以上の如く嘗に宗教は其の根底が科學の如何ともすべからざる深遠の境地にあ
 るのみならず、そは又人類の道德的本能に對して至切の關係を有し、古より實際生
 活の柱となり、力となりて、深く人心を薰陶し來れるものなるが故に、その勢力たる
 や往々にして國家の權力を凌ぐものあり、而して科學は如何に進步發達するも、其
 の性質上到底此れに代りて人心を支配すること能はず。科學の能く支配し得ると
 ころは社會に於ても又人心の上に於ても僅かに其の一部分、一方面に過ぎず。到底
 人生の一般に對して廣く且つ深く其の權力を振ふこと能はざるなり。

此れを要するに科學の司る範圍は全く宗教以外の天地にして、宗教其物の本質に
 對しては、彼れは遂に容喩するの權利なきなり。唯宗教の中に包含せらるる迷信的
 部分を批正するの一標準たり得るのみ。科學は須らく宗教以外の天地にありて其
 の目的を達すべく、宗教は宜しく科學以上の世界に住して其の本領を發揮すべし。

第三節 宗教と倫理

論 教 / 宗 眠 催

宗教と倫理との歴史的起源を考ふるに二者は全く同一源頭より發生し來れるものなるを知り得べし、古代にありては倫理は神の制裁を受け宗教と道德即ち神に對する敬虔の念と有徳とを同一視せられたるものにして、神を恐れ神を敬すること、歴は即ち善にして、神を瀆し神に不敬を表はすことは其が唯一の罪惡なりしこと、歴史の明示するところなり、斯く二者は歴史的の關係を有するに止まらず、亦内部的の關係をも有す、宗教も倫理も一方より言へば共に何等か自己以上の意志に對して自己の意志を制限するてふ趣きを有す、勿論二者が自己以上の意志に對する態度には異なるところあるべしと雖も、兎に角現在の個人的意志以上の意志に合せんとする希望に至つては共に一なりと言はざるを得ず。

斯く二者は互に深き關係を有するものなりと雖も、其間又自づから異なる趣を有す、則ち倫理的の生活に於ける特殊相は自力精進てふことにして、自己自らが自己の理想に依りて自己を實現するといふ態度なるが、宗教的生活に於ける特殊相は他

理 倫 と 教 宗

力依馮にして、何等か自己以上のものに頼り、其の恩寵によりて安立し活動するといふ態度なり、而して此の二つの特徴は抑も人性の如何なる點に其の根底を有するものなるかといふに、元來人間は此れを一個體として見ることを得ると同時に、又國家の一民社會の一員、進んでは宇宙其物の一分子として見るを得るものなり、即ちそは一團體として獨立の存在をなすと同時に、又一方に於ては全社會全宇宙の一部分として依他的の存在をなすこと、恰も有機體に於ける細胞の如き位置にあるものなり、此の獨立せる一面と、依他的なる他面との人性の二面に基づきて、一よりは自力精進起り、他よりは他力依馮生ずるものなり、而して前者は道德的生活となりて現はれ、後者は宗教的生活となりて現はる。

されど斯くはいふも此は暫らく抽象的に然か言ひしのみにして、具體的事實としては此の獨立的及び依他的てふ人生の二面は元來一物の兩面に過ぎざるを以て、各々隔離して別存するものにあらず、恰も人心を其の現はれの相によりて假りに知情意の三つに分つと雖も、事實としては此の三者全く分離して存すると無きが如し、されば斯かる人性の兩面に其根底を有する倫理と宗教とも全く無關係に存

し得ざることは勿論なり、故に宗教的生活の特相は他力依馮にありとはいふもそれは抽象的に考へたる場合のことにして、事實としては純然たる他力依馮よりのみ成るには非ず、又倫理的生活に於ても此れと一般純然たる自力精進よりのみ成るにはあらざるなり、他力的の中に自から自力的の消息を含み、自力的の中に亦他力的の消息を含む、只宗教はより多く他力依馮に傾き、倫理はより多く自力精進に傾くといふを得べきのみ。

扱て斯くの如く倫理と宗教とは具體的事實としては深き關係を有して、互に相出入し、相交渉するところありとせば、吾人は倫理道德の發展が大に宗教の發展を促進するものなることを察するを得べし、宗教的生活は人と人以上のもの、即ち神との對立に依りて成立するものなるが、此れに就いて尤も必要なることは神の性質を知ることなり、人は自己の崇拜する神の性質を何等かの方法に由りて寫象することなしには満足し得べきものに非らず、而してそれを寫象するに當つては必ずや此れを自己の理想或は目的てふものと關係せしむ、吾人は自己の目的や理想に對して世界の進行が全然關係無頓着なるものにては考ふることも能はず、即ち自己

の理想目的と神との密接なる關係を認め、神に於て其の理想目的を讀まんとするに至る、此れ人性の自然なり、其結果宗教上の神が必然的に吾人の理想目的を以て賦彩せらるゝに至る、こゝに於て乎吾人が道德上最高且つ最善なりと認むるところの性質、即ち正義慈悲又は愛といふが如きものは悉く神の屬性として認めらるゝに至る、此れを歴史に徴するに種々の時代種々の國民の宗教を驗する時は、其の神が必ず其の時代其の國民の道德上の賦彩を帯び、其の時代其の國民の道德上の理想の保持者又は代表者たりしことは明かなる事實なり、斯の如く宗教の容體たる神の屬性、即ち道德的理想の進歩は、やがて神の觀念を向上せしめ、従つて又宗教の發展を將來することは當然なりしといふを得べし。

此の如く宗教生活と倫理的生活とは密接不離の關係を有するものがあるが、然らば宗教と倫理とは全々其範圍を等しうせるものなるか、宗教以外に倫理的生活の行はるゝ餘地なきか、又倫理以外に宗教的生活の行はるゝ餘地なきか、此れ一瞥を要する問題なり、若し此れを抽象的に考ふれば、宗教と道德とが其の領域を異にすること勿論なり、又具體の場合に於ても倫理的生活が其中多少の他力分子を含み、

宗教生活が其間自ら自力分子を藏すとは言へ、前者が正邪善惡の區別を認めて自力的精進をなすを以て本領とし、後者が神佛といふが如きものを立て、此れに對して他力的依馮をなすを以て其の本領となすとせば二者は必ずしも一致するものとは言ふを得ず、普通吾人が呼んで道德となすもの、中には神や佛といふが如きものに何等の關係をも付けず、勿論理論上より言へば道德の根底も實は社會否更に溯つて宇宙の大原即ち絶對なるものに此れを有するものあれど、然かし道德的生活を營める當人の心持ちに付いて見る時は、そこに必ずしも絶對とか神とかいふが如き觀念の存するを見ず、即ち道德に於ては孝をなし、忠をなすもそはたゞ其を義務と感じ、爲すべきこと、感じて此れを爲すにて必ずしもそれ以上のことを念頭に置かざるなり、然るに宗教にありては此れと少しく其の趣きを異にし、一舉一動悉く此れを神の爲に、神の命じ給へることを爲すといふが如き一種の意識の伴ふを常とす、假例へば一椀の飯一杯の水を採るにも神恩と思ひ、祈禱を捧ぐるといふが如く、凡てのことを爲すに當つて一々神や佛と關係を付けんとするが如き趣あるは宗教生活に於ける事實なり、謂はゞ宗教的生活は有神的生活なり、道德

に於ては必ずしも然らず、斯くの如く二者は必ずしも其の範圍を一にせず、されど道德的生活と宗教的生活とは決して契合し能はざるものにはあらず、即ち吾人は有神なる道德生活の成立し得ることを認むるものなり、元來道德は前にも言へるが如く自己の意志を制限して自己以上の意志に従ふて、性質を有するものなれば、若し其の意志國民意志、社會意志、更に進んでは絶對意志を絶對的の權威として感ずる迄に、至れば道德は己に宗教と一致し來れるなり、此れを古來の道德的天才に就て觀察するに、其の偉大壯嚴を極めたる生活には甚だ多くの宗教的消息を見出し得るなり、ソクラテスが常に自家良心の聲を神の聲として聽取せるを始とし、偉大なる無神論者と呼ばれたるスピノーザが其實在を神と呼びて、其前に頼付きたりしが如き、又は孔子が天生德於予、桓魋其如予何、と言ひ、天元未喪斯文也、匡人其如予何、と叫びて我が道と天との關係を認め居たりしが如き、何れも其の心情の奥所には堂々たる宗教的確信のありしことを察し得べし、道德的生活は斯の如き宗教的賦彩を帯び來りてこそ始めて生氣あり、光彩あり、偉大なるものとはなるなり、否か、る宗教的根底を有せざる道德倫理は未だ決して其の光輝ある極致に達

せるものといふを得ざるべし。

さて吾人は道德の宗教的に近づくを以て望まじきこと、考ふるものなるが次に然らば宗教は道德に反して立ち得るものなりや、即ち反道德の宗教的生活は可能なりや否や、此の一間に答へて以て本節を終らんとす。

宗教の本領の倫理以外にあることは前にも言へる如くなれど此は決して道德の範圍と宗教の範圍とが全々離接的なりといふ意にはあらず、吾人の見を以てするに寧ろ宗教は道德の範圍を包攝して更に其れ以上の所に其の本領を有するものと信ぜらる、宗教は決して道德を排して立つべきものにあらず、寧ろ道德を容れて立つべきものなり、宗教家は往々にして此の點を誤解して救ふべからざる敗徳墮落の境に陥ることあり、吾人は竊盜を働き詐偽を行ひ或は不孝不忠にして猶能く宗教家たり得べきかを疑ふものなり、抑も倫理とは何ぞ、此れ吾人が人として社會に生活するに當りて當に履むべき又踐まざるべからざる道に非ずや、即ちそは人の人たる唯一の道に非ずや、されば宗教と雖も苟も人として社會に生存する限り此の道を忘れて可なるの理あらんや、人生はもと宗教の爲に存するにあらず、却つ

て宗教と人生の爲に存するなり、而して假りに人世は宗教を離れて立ち得るとするも道德を離れては唯の一日も立ち得べからざるなり、故に吾人は哲學者たると科學者たると將た宗教家たるとに論なく、必ず先づ道德倫理を修めざるべからず、此れを修めて然る後始めて哲學者たるべく、科學者たるべく、將た宗教家たるべし、此の故に假令へ宗教の本領は道德以外にありとするも決して道德を蔑視して可なるの理由あらず、此れを要するに宗教は道德を包攝して立つべく、道德を排して存すべきものにあらざるなり。

第四節 宗教と教育

予は前節に於て道德が宗教的に近づくことを以て甚だ望まじきこと、なし、茲に至つて始めて道德は其の光輝ある極致に達せるものなることを言ひたり、即ち道德も宗教も其の極致に至れば畢竟一に歸することを言ひたり、今此の點より考察すれば宗教と教育との關係は略察せらるべきなり、抑も教育の目的は何ぞといふに人間が人間として立派に道德を行ひて天地に恥づるところなく、生活し得る人

物を養成するにあり、尤も教育の目的は管に人をして道德的完全を得せしむるのみにあらずるべしと雖も、其の第一の目的はこゝにあり、而して道德と宗教との關係は前述の如く密接不離なると恰も鳥の雙翼車の兩輪の如きものとせば、道德的完成を第一の目的とする教育が全く宗教を離れて全うし得べからざるは明かなり、然るに我が國教育家の如き德育德育を常に叫びながらその德育に最も深き關係を有する宗教を極力排斥して止まざるは吾人の不審に堪へざるところなり、彼等は佛國式の排宗教的教育に動かされ或は未だ毫も究めずして宗教即迷信と心得、雷同附和を以て此に至れるものか、彼等は毫も宗教其物の本義を解せず、倫理的宗教の如き位置の高上なるものに對しても一瞥をも與へんとはせざるなり、之れ甚だ誤まれること、言はざるを得ず。

更に一步を進めて考ふるに教育の目的とは畢竟人格の完成を期するものに外ならず、而して人格の完成とは抑も何を意味するぞ、其間種々のものを包藏すべしと雖も、要するに知情意三者の圓滿なる發達を期することにあらずや、余は今知育及び意育に關しては暫く言はざるべし、唯情育に就いて之れを見るに、彼教育者は一

般に其の重すべきを唱え、而して其が唯一の方法としては文藝に關する趣味の養成に力むるが如し、此れ甚だ可なり、然れども感情の産物は管に文藝のみには非ず、更に重要な他のものとして宗教なるもの、存することを忘るべからず、然るに管り宗教的感情の養成のみ此れを閉却するは何ぞや、勿論教育は一方に於ては迷信的感情を遠慮なく打破し行かざるべからずと雖も、神の愛や佛の慈悲といふが如き高尚なる宗教的感情は此れを傷けざるのみならず、其を助長し、其を培養し、其れを善導して敬虔の美情を高めざるべからず、西洋に於ては學校と教會と相待ち相助けて此の目的の實現に努めつゝあり、然るに我國に於ては遺憾ながら學校と寺院とは互に相反目し相傷けつゝあるなり、斯くては到底花も香もあり、潤ひある國民を養成し以て道德を進め、風教を振作するなど覺束なきことなり。

殊に兒童は其の家庭に於て何等か宗教の影響を受けざるは稀れなるを以て、學校が故なく此れを破壊し、排斥せんとするが如き態度に出づる時は、第一家庭教育と學校教育との間に一大分裂を生じ、その結果兒童の觀念を紊亂し、錯雜せしむるに至る、此れ教育上の大害なり、教育は其の言語のエデュケーションに表はれ居るが如く、

論 教 宗 眠 催

人性に元來無きものを漫りに詰め込む物にあらずして、古來人性に生存する種々の能力を引き出だして此れを完全に發揮せしむることなり、故に教育者は言はゞ兒童に助勢して其が藏れたる性能を明かに發揮し産み出さしむる産婆の如きものとも言ひつべし、故に開發主義教授の元祖と稱せらるゝソクラテスは自ら其の教授法に名づけて産婆術と言ひき、此の故に教育者は兒童の本來内に有する所を抹殺すべきものには非ず、斯くては産婆の役は務まらざるなり、則ち教育者は兒童の心中に萌芽として存在する宗教心の如きをも此れを直ちに迷信呼ばゝりすることなく、飽迄を助長し、發揮し以つて高上なる宗教的感情を養成すべきなり。次に國民教育と宗教との關係に付きて一言せんに國民教育にありては目的の繁榮發達の完成てふこと其が終極の目的なるを以て普汎的世界的なる宗教と少しく其の目的を異にするところあり、従つて全々二者の契合を期するは非なり、故に今俄かに佛教又は耶穌教等の如き特殊なる成立宗教を國民教育の中に容れて禮拜儀式等凡てその一に依つて律するが如きことは勿論不可能又不必要のことなり、されど國民教育と雖も、彼の人性本然の要求たる宗教を無視し蔑視し或は敵視

育 教 と 教 宗

すべきにあらず、此の要求たるや國民を形成せる一般各員が其の心底に有するところのものなれば此れに抗して立つ教育は決して眞の國民教育たるを得ず、先きにもいへる如く古來より宗教は社會道德の支持者にして、且つ今日と雖も宗教と道德とは唇齒輔車の關係を有し互に相携つゝの位置にあるものなれど、國民教育に於ても此れを敵視し、或は排斥すべき理由なく、否寧ろ友とし、助力者として共に手を取りて進まんことを期圖せざるべからず。されど教育上に於ては特種の教育に依り、特種の信仰を注入するが如きことは力めて之れを避けざるべからず、蓋し斯くする時は往々にして未熟なる兒童の精神を偏狹頑固ならしめ、各種能力の圓滿なる發達を期すること難ければなり、特に教育者の深き注意を要するは迷信なり、迷信の害は已に數々説きたれば、今改めて言ふを要せずと雖も、其の人を傷け、世を害すること夥しきものなれば、教育者は勉めて公正の見地に立ちて此れが剷除打破に力を用ゐざるべからず。此れを要するに宗教は教育の範圍より驅逐せらるべきものにあらず、却つて此れを容れてそが助力者となし、朋となして、以て趣味あり、潤澤あり、光彩ある人格の養

成を圖らざるべからず、此れ理論上よりも實驗上よりも誤りなき須要のことなり、有名なるペーコン宗教を言つて曰く、僅かに學問の盃を口にせる者は無神論者となれど、深く知識の活泉を味ひたる者は宗教に還ると、宗教の深義を知らずして漫りにそを斥くるは夫れ未だ淺いかな。

第九章 成立宗教

第一節 佛教

佛教は世界に於て最も高尚偉大なる宗教の一にして、今より大凡そ二千五百年の昔中印度恒河畔の摩訶陀國に出生せる大聖釋迦によりて説かれたるところとす、其の教育廣大にして法間八萬四千經卷五千七百と稱せらる、吾人は今此の驚くべき尨大なる教義を僅かに數百句の間に解かんとす、此れ固より難事中の難事にして、それが千萬分一の面影だに髣髴することを得ば望み足れり、扱て學者先づ佛教を分つて二種となす、小乗及大乘之れなり。小乗とは何ぞや、轉變有爲窮りなき現象的の世界を觀じて極惡多苦の念を發して

以て人生を多苦觀し、其の多苦の感想よりして世界も吾人の身體も共に何等の價値なきもの、愛惜するに足らざるものとなして此れを厭ひ、生きては唯己れを守りて事物に愛着するの念を絶ちて克己禁慾の主義に陥り、歸しては身心二つながら此れを斷滅して、以て空々寂々たる寂靜無爲の消極的涅槃に達せんとするもの、此れを小乗となす、次に大乘とは有爲生滅の現象の世界即ち眞如なり、實在なりと觀じ、現象即實在萬法即眞如なるを以て厭ふべき苦あることなく、欣求すべき樂あることなし、宇宙萬有の本來一にして然かも二面的表現をなせるに過ぎざること、を達觀し、其の達觀力によりて一切の慾念執着を離脱して無碍自在なる積極的涅槃の境に到り、其の涅槃の無碍の妙用を施し、自利々他の行法を修治して、以て自他平等の目的を實現せんとするもの、此れなり、即ち小乗に於ては萬法と眞如、現象と實在とを峻別して未だ現象即實在の眞理を達觀するに至らず、徒らに有爲生滅の現觀の一面をのみ見て厭世苦觀し、身をも世をも打ち捨て、枯淡寂莫たる消極的の涅槃に到らんと力む、此れに反し大乘にありては萬法は即ち眞如にして、現象は即ち實在なりと達觀し、此れを以て欣ぶ可きの樂もなく厭ふ可きの苦もあること

催 眠 宗 教 論

なしとなし、以て融通無碍活氣縱横の積極的涅槃に達せんとす、即ち小乗は消極的退守的偏執的にして大乘は積極的達觀的なり、而して此等二種の教義が一佛教の中に并存するは甚だ矛盾せるに似たりと雖も、實は然らず、元來小乗は大乘に入るの初階方便として説かれたるものにして直ちに大乘の深義を會得し難き劣機鈍根の徒に對しては先づ初めに大乘に入るの方便入門として小乗の教義を説けるものなり、此れ即ち愚法小乗の名ある所以なり、斯の如く釋迦は説教をなすに當りて所謂應病與藥と稱するが如く、人により時により、所によりて所説の教義に深淺高卑等の別をなしたり、従つて佛教の各宗に於ては其の所依とする主要の經典に基きて以て至佛教々義の判釋をなすこと生じ來れり、而してその判釋たるや各宗によりて一様ならずと雖も、今は便宜の爲めに、且つ最も理解し易からしめんが爲に解深密經の所説に従つて有空中三時の判なるものを略載すべし。

釋迦は第一時即ち説法の初期に於ては劣機下根の凡夫誤まりて我の存在を忘信せるを見此の如き凡夫に對して人我を空なりと説きて、我の存在を信ずることの妄見なることを説き、我の本來無なることを教へしも猶法は有なりと説きて以て

佛

教

外界萬物の存在を許したり、即ち所謂我空法有の旨趣を説けるもの之れを有効とは名づく、此れ四阿含及び其他の小乗の教義に於て説けるところのものとなす。

第二時に於ては知識淺き世上の凡夫第一時の有効に依りて漸く、我の存在の妄見を脱却して我の空なる所以を知得するに至れりと雖も、法有と説きて萬物の存在を許したる眞意を悟らず、尙ほ法の存在を妄信して實有の迷執を離るゝこと能はず、是れを以て第二時に於ては心を離れざる諸法は此れを有なりと説くも、心を離れては別に萬物の存在を是認せず、然るに我空法有と説ける言に拘泥して五蘊等の如き法體の吾人の心以外に實存すと信ずるの迷謬なることを知らしめんが爲に我法皆空と立て、我もなく又法も無しと説けるもの此れ第二時に於ける空教の旨意なりとす。

第三時に於ては偏有偏空の妄見を打破せんとして非有非空の中道を説けるなり、即ち第二時の空教にありては諸法皆空と説破せりと雖も、絶對的に空を主張するにあらず、吾人の心外に法ありとなすは謬見にして、心を離れて別に法なきは勿論なりと雖も、心に離れざる内境をも共に空なりとなすには非ず、然るに人動もすれば

催 眠 宗 教 論

皆空の言に執して、一切皆空と見るは妄見なりとなして之れを斥け、偏有偏空の説を信ずる者に對して宇宙一切の萬法は有にあらざ、又空にもあらざ、非有非空の中道の妙理なることを説けるものを名づけて第三時の中道教と稱するなり。

斯く三時の判を立て、有空中三種の教義を構ふると雖も、而かも此等は本來差違あるにあらざ、大凡そ人類機根の三階段に配して三種の教義の類別をなせしに過ぎざるなり。

右の外佛教には更に種々の分類あり、大乘には更に亦た權實、顯密、教、禪、頓、漸、淨、淨等の分類存するを以て、今次に此等數種判釋を掲げて以て此等分類の那邊に本づくかを略叙すべし。

權大乘と實大乘との判釋をなすにも宗門に依り學者によりて其の趣きを異にすれば一様に説くこと能はず、今は只權と實とが何を意味するかを説かんが爲便宜上天臺宗智者大師が五時の範疇なるものに依らん、所謂五時とは、一に華嚴時、二に阿含時、三に方業時、四に般若時、五に法華涅槃時をいふものにして、初めの四時の教義は此れを權教と稱し、第五時の法華涅槃時に於ける教義のみ之れを實教なり、眞

佛

教

實究竟の教義なりとなすなり、然らば權教と言ひ實教と呼びて此れを判別する所以の理由果して何處にありやといふに、釋迦法華を説ける以前の四十餘年間の教義は悉く此れを假權の一次的方便的の教義となし、而して唯法華經のみ眞實究竟の教義なりとなすなり、此れを法華宗に於て説く所とす、要するに釋迦法華を説く迄の教説は此れ唯人々の機根に應じて彼等をして法華の妙理に導き入れざるを得せしむる迄の假權方便準備的のものとして此れを權教とは名づけ、而して釋迦最後の教説たる法華經の妙理を以て究竟至極の眞理と見て此れを實教とは名づけたるなり、されば二者は其の質を異にするが如しと雖も元より密接不離の關係を有するものとなすなり、但し權實二教の區別はたゞ一が他の準備方便となり他が其の目的となるの關係を示せるものに過ぎざれば決して其の區別を以て絶對的のものとは考ふべからざるなり。

次に顯密の意義は如何、此れを明かならしめんが爲に今弘法大師の判を以て此れを説明せんか、弘法に依れば佛教を判釋するに豎横の二範疇を以てす、即ち第一に豎に考へて十住心の判をなし、第二に横に考へて顯密二教の判を爲す、而して後者

催 眠 宗 教 論

に於ては釋迦の説ける凡ての教義は悉く此れを顯教と稱し唯だ法身の依つて説かれたる法即ち所謂金剛界胎藏界の兩部をば密教と稱するなり所謂法身とは佛陀の自内證身換言すれば宇宙の本體其物にして眞言宗に於ては此れを直ちに人格的の神即ち大日如來と立つるにて其の如來の直接説けるところの教説此れを密教なりとなし他は凡て此れを釋迦が方便として説けるもの普通の形式に依りて何者にも會得し得るやうに説けるもの即ち甚深の妙理のたゞ皮相表面のみを説けるものとなし此れを顯教とはなせり要するに此れ顯教は人知の程度に應じて説ける方便的の教義にして密教は直觀的自證的なる秘密不可説の妙理なりとなすものなり。

次には教禪の意義を説かんが爲に禪宗の教判を以てすべし抑も禪宗教義の一般特性とするところは教外別傳不立文字直指人心見性成佛にあるものにして其の言ふ所に依れば釋迦の口より説かれ或は經典に記されたところは未だ佛教の皮相佛心の表面丈けに止まりそが眞實の妙趣にはあらず眞實の妙趣は只心を以て心に傳ふべく言説し得べきものにあらず佛法の妙義は一切の口舌辯論を避け

佛

て禪定默思に依り本來自家心中に潛み居る佛智佛性を見得し證悟すべきのみとなすなり此れを要するに禪宗にありては一切理屈の沙汰を斥けて直覺的に冷暖自知自證自悟するによりて始めて眞理は獲得せらるべしとなし別に所依の經典なるものを立てざるを以て其の特色となす而して此の禪宗以外は凡て所依の經典を有するを以て此れに對して教宗とは呼ぶなり。

教

次に頓漸の區別を語らんに眞宗及び其他の淨土教派に於ては頓教とは佛果を成し或は利益を得るに就いて一々修業を積み實行を重ねて幾多の苦勞の結果此に到るを須る直ちに佛陀の請願力加護力によりて此れに到るを得となすものを言ひ漸教とは此れに反するものをいふ即ち漸教にありては佛果を得解脱を得るに就いては自力的に嚴格なる律法に従ひて一善一行より進み一步は一步と漸次修業の功を積まざるべからずとなす故に此れを難行道と呼び又聖道門とも名づく此れに反して頓教にありてはかゝる自力修業を敢て要とせずたゞ一向に佛を念じ佛に委托すれば他力的に佛の大慈大悲力によりて救ひを得解脱を得となす故に此れを易行道と呼び又淨土門とも稱す彼れは自力精進を主とし此れは他力

恩寵を主とす、之れを要するに頓漸二教は利益を得るの遲速によりて區別せる名稱なり。

以上は佛教を一覽せる概觀に過ぎず、此は實に世界的成立宗教の一にして歴史的發達を遂げたるもの、その教義組織の宏大なる他に比類を見ず、其の内容を明解せんは蓋し一卷の書の企て及ぶ所にあらず、況んや一節の文字に於てをや。

第二節 基督教

催 眠 宗 教 論

基督教は今より千九百年の昔ヘロデ王の時猶太のベツレヘムに生れたる大聖耶穌基督の宣傳せる宗教にして爾來滔々として歐洲の天地に擴がり今日に於ては殆ど世界至る所に其の勢力を振ひつゝある大宗教なり、然れ共其の説くところ佛教とは大に其趣きを異にし、極めて單純且つ簡易なり、其の教義の如きも後世に至りて多少一定の組織を得たりと雖も、原始の時代に當りては殆ど一片の宗教的感情を述べたるものに過ぎざりき。

基督の意に曰く、天の父なる神は人間に對して無限の愛を注ぎ給ふされば其子たる

基 督 教

る人間も亦彼れを愛し彼れを敬ひ又互に兄弟として相愛すべきものなり、然るに人間は罪惡の心を起して天父に背きたり故に人間は須らく其の罪惡を悔いて天父に歸り天父に違ふことを力むべしと斯くて彼れは當時猶太の祭司及び學者等が儀式と傳説とに拘泥したるに反し宗教の要は外形にあらずして唯内心の正を以つて天父に仕ふるにありとなし、身を以て凡て罪あるもの疲れたるもの重きを負へる者の救済に任じ我は即ち猶太國民の期待せる救世主メシヤなりと唱へたり。

斯く基督教は其の始めにありては單純にして且新鮮なるものなりき、而して後使徒ポールに至りて初めて教理組織の萌芽を見る、ポール以爲らく人類の祖アダムが罪惡を犯したるに依りて人類は罪を犯すものとなれり、是に於て神のひとり子なる基督此の世に降りて十字架上の苦痛を受け之れに依りて以て人類の罪惡を贖ひ人類と天父との間に媒して人類を救ふと、此れポール神學の要旨なり、更に降つて紀元四世紀の初葉より同五世紀の半ばにかけてニカイヤ宗教會議を始めとして種々の宗教會議開かれ、亦アタナシウス、アウガスチン等種々の學者の論議に

催 眠 宗 教 論

依りて略々その教義一定するに至れり、而してそは神、基督、人類三者の關係及び性質に就いての教義の確立なり、即ち第一に神性論は三位一體説によりて、第二に基督論は神人説に依りて、第三に人性論は原罪及び神恩の説によりて解決せられ、此等の三大結案は爾後基督教條の大綱とはなりぬ、三位一體説とは子なる神と聖靈とは父なる神の本質より生ぜし者なれど造られしものには非ず、其の生ずるは恰かも光線の太陽より發するが如く内的必然性を以てし決して意志に依りてにあらず、されば子と聖靈とは父と全く同質にして其れと共に一體をなせるものなりといふにあり、次に神人説とは基督は神にして同時に人となれるものなるが故に彼は神と人との兩性を合一せりとなすものなり、第三の原罪及び神恩の説とは有名なるアウガステンの提出せるところにして、人類の祖アダムは其の自由意志を誤用して罪惡を犯せるにより其の自由を失ひたるが彼れの子孫なる人類は又其の性を享けて罪惡を犯さざるを得ざる状態に陥れり、斯く吾等人類はアダムの原罪に由りて今は全く罪の奴隸となれるが故に如何にするも自ら救濟を求むる權利なし、救濟は全く神の恩みに由るものなりとなすもの也、

基 督 教

右は後世教會の學者に依りて決定せられたる教義の大綱なるが予は更に翻つて原始基督教が抑も如何なることを教へたるかを略説せんとす、
 先づ第一に人は一向專念に神を信じ、神に委頼して漫りに衣食等のことを思ひ煩ふことなく今日の一日を神の爲に清く尊く働き力むべきことを教へて曰く、人は二人の主に事ふること能はず、そは此れを惡みかれを愛しみ是れを親しみかれを疎むべければなり、爾曹神と財とに兼ね事ふること能はず、此故に我爾曹に告げん、生命の爲に何を食ひ何を飲みまた身體の爲に何を衣んと憂慮ふこと勿れ、——爾曹のうち誰か能く思ひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んや、又何故に衣のことを思ひ煩ふや、野の百合花は如何にして長つかを思へ、勞せず紡がざるなり、——神はけふ野にありて明日爐に投げ入れらる、草をも如此裝はせ給へば況して爾等をや、嗚呼信仰すき者よ然れば何を食ひ何を飲み何を着んと思ひ煩ふ勿れ、——爾曹の天の父は凡て此等のもの、必需ことを知り給へり、爾等先づ神の國と其の義とを求めよ、さらば此等のものは皆なんぢらに加へらるべし、此故に明日のことを思ひ煩ふなかれ、明日は明日の事を思ひ煩へ、一日の苦勞は一日にて足れり、馬太傳、六章

催 眠 宗 教 論

扱て次に基督教の中心は愛なり、神に對する愛は勿論のことなるが更に人類相互間に於ける絶對的の愛を教へたり、曰く、爾曹の隣を愛みて其敵を憐むべしと言へることあるは爾等が聞きしところなり、然かも我爾曹に告げん、爾曹の敵を愛み爾曹を咀ふ者を祝し、爾曹を惡むものを善視し、虐遇迫害もの、爲に祈禱せよ、馬太傳五章四三及四四と、又其の愛は無報酬的にして且つ偽善的なるべからざること、教へて、爾施濟をする時、右の手の爲すことを左の手に知らず、勿れ、如此するは其施濟の隠れんが爲なり、馬太傳、六章三と言へり、斯く愛の主上なることを説く傍ら又義を重じ律法を尙ふべきことをも忘れず、後者に就きては、我れ律法と預言者を廢つる爲に來れりと思ふこと勿れ、來りて此れを廢つるに非ず、成就せん爲なり、馬太傳、五章一七と言ひ、前者に就きては、學者とパリサイの人の義よりも爾曹の義と勝れずば必ず天國に入ること能はず、馬太傳、五章二〇と言へり。

又純潔は其の最も尙ふところなり、曰く、心の清き者は福なり、其人は神を見ることを得べければなり、馬太傳、五章八と、更に情慾に就きて此れを言つて曰く、凡そ婦を

基 督 教

見て色情を起すものは、中心すでに姦淫したる也、馬太傳、五章二八と迄で痛言せり、又謙遜と従順とも基督の常に口にせしところなり、たとへば、心の貧しきものは福なり、馬太傳、五章三と言ひ、柔和なる者は福なり、馬太傳、五章五と言ひ、嬰兒の如く自ら謙る者は此れ天國に於て大なる者なり、馬太傳、十八章三と言へるが如き皆然かり、更に勇氣に就いては、我爾曹に告げん、惡に敵すること勿れ、人汝の右の頬を打たば亦他の頬をも轉らして之れに向けよ、爾を認へて裏衣を取らんとするものには、外着をも亦取らせよ、馬太傳、五章三八—四〇、身を殺して魂を殺すこと能はざるもの、ことを得ん、勿れ、馬太傳、十章六等と言ひ、忍耐を言ひては、終り迄忍ぶものは救はる、ことを得ん、と言ひ、或は肉慾を禁制すべきことを説き、獨身生活の寧ろ望ましかことを教ふ、而して現世的の富又は名譽等に對しては極力此れを斥けたる形跡あり、即ち曰く、富者は天國に入ること難し、——富める者の神の國に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し、馬太傳、十九章二三及二四と、雷に之れに止まらず、凡て我名の爲に家宅或は兄弟或は姉妹或は父或は母或は妻或は子あるひは田疇を棄つる者は百倍を受け且つ窮りなき生を嗣がん、馬太傳、十九章二九と言ひ、或は若

し我に従はんと慾ふものは己を棄てその十字架を負ひて我に従へ。馬可傳、八章三四とさへ言ひて神の道の爲には現世一切のものを棄つべきことを要求せり。されど又常人に對しては家族的道德の輕ずべからざることを説けるふしもあり。即ち「爾の父と母とを教へ。馬太傳、十章十九」と言ひ又「元始に人を造給ひし者は之れを男女に造れり。是故に人父母を離れて其妻に合ひ二人のもの一體と爲なり」と云へる。を未だ讀まざるか。然ればはや二つにはあらず一體なり。神の合せ給へるものは人此れを離すべからず。——姦淫の故ならで其妻を出し他の婦を娶る者は姦淫を行ふなり。馬太傳、十九章四—九と言へり。

以上は原始基督教所説の概観なり。此れを要するに基督教は神の愛なること故に其子なる人も亦彼れを愛し且つ相互にも兄弟の情を以て相愛すべきこと信仰の絶對的なるべきこと及び貞潔、從順、謙遜、忍耐、勇氣等の重すべきこと、神の爲には富貴名譽、權力、虚榮等を斥け、又肉身の桎梏をも離脱して清き生活を爲すべきこと等を教へたるものといふべし。

第三節 佛基二教の異同

以上余は佛基二教の大意を言ひたれば次ぎには聊か其の異同に就きて語らんと欲す。

先づ佛耶二教一致の點より言はん。に佛教も基督教も共に均しく世界的の宗教なり。二者は孰れも一國民或は一民族のみに依りて信奉せらるべき底のものに非ず。則ち彼の希臘に於ける多神教の如く或はイスラエル民族に於ける猶太教の如く一國或は一民族と特殊の關係を有して其れ以外に通用せざるが如きものに非ずして極めて普遍的世界的にして一切の所に融通するの性質を有す。

又二教は共に倫理的宗教にして彼のヘルナルツが所謂宗教進化の最高階段とさせる神の爲に自己を愛すの境地に達せるものなり。即ち共に人類の道德意識の至高なる要求に充分の満足を與へ彼の律法的他律的なる状態より一步を進めて神の中に自己を認め神の爲に自己を愛し我は神の爲に生くるものとの自覺を以て一日一刻の身命をも等閑にせず神の爲に全力を擧げて働かんとする自律的能働

的積極的のものなり、此點亦他の宗教には見ざるところにして、只二教に於てのみ相一致するところなり。

催 眠 宗 教 論

斯く共に世界的宗教なること及び倫理的自律的なる最高の宗教なることに於て一致すと雖も又相異なる點も決して少なしとせず、先づ第一に佛教は理智に傾き靜的なるに反して基督教は感情に富み動的なり、元來此種の區別は佛基二教の差と言はんよりも寧ろ直ちに印度思想と希臘思想との差なりともいふを得べく即ちもと印度思想は内省的思索的哲學的の傾向を有し従つて靜的消極的なるに反し、猶太の思想は情熱的感動的宗教的の傾向を有し従つて動的積極的なり、前者は主智的にして後者は唯情的なり、前者は晩秋の蕭條たる趣を宿して寂味さびみあれど後者は初夏の菁々たる風情を具へて新鮮の色あり、此く印度猶太の二思潮は殆ど反對のコントラストをなせるものなるが佛教及び基督の差異は蓋し此れを反映せるものに外ならず。

次ぎに基督教は人類を平等的の見地より見るに傾き従つて改命的の分子に富む。此は假例ば、地ちに泰平たいへいを出ださん爲に我來れりと意ふ勿れ、泰平を出ださんとに非

佛 基 二 教 の 異 同

ず及を出ださん爲に來れり、夫れわが來るは人を其父に背かせ女むすめを其母に背かせ、媳めかけを其姑に背かせんが爲也、この基督の言に徴しても窺ひ知らるべし、然るに佛教にありては勿論人類否草木瓦石の末に至る迄で此れを平等的の見地より見ると雖も亦同時に此れを差別的の方面より見ることをも忘れざるが故に比較的穩健の態を持す、されど基督教の歴史は往々にして血を以て染めらると雖も佛教に於ては殆ど此の事なし、此れを譬へば基督教の旗色は赤色にして佛教の旗色は青色なり、従つて前者は熱情あり活氣ありて痛快を極むと雖も時に狂熱に流れ過激に陥り遙かに常道を逸して穩健の姿態を缺かんとするの傾きあり、此れに反し後者は中正穩健にして能く健全なる哲理に依りて信仰の内容を堅實に保持すと雖も動もすれば冷灰枯淡に陥りて熱情に乏しく退嬰的に失せんとするの風あり、此の故に基督教は青年の宗教にして佛教は中年以上の者の宗教なり、従つて其が教法弘通の態度より見るも基督教は所謂學者の如くならず權威を持てる者の如く教へ給ふ、馬太傳七章二九底にして侃々如たりと雖も佛教にありては講話的説述的にして詢々乎たり。

次に佛教は概して自力的に傾きて精進解脱に重きを置き基督教は絶対に他力的にして信賴救済を第一義とす此れ又印度思想の達觀的自悟的なるに對し猶太思想の敬虔的信賴的なるの差に基づくものといふべく此點よりして又佛教は男性的にして基督教は女性的なりとも評することを得べし但し斯くはいふも此れ決して價値の優劣を評定せるには非ず價値の上より言はゞ孰れにも長短はあるべし。

此等は佛基二教の相異なる所を大らかに言へるものにして其間自づから特色の存するところを察し得べし若し夫れ價値上の長短優劣に至つては吾等風情の輕々しく斷じ得るところに非ずたゞ讀者の判斷に委すべきのみ。

第四節 理想の宗教

理想の宗教如何てふことは甚だ難透の問題にして吾人は今一々其の教理教會制度儀式等に立ち入りて此れを豫め確言する能はず只大體に於て如何の資格を要するかを語らんと欲するのみ。

先づ第一に理想の宗教は倫理的ならざるべからず前にも言へる如く反道徳的の宗教は遂に其が社會的根據を失ひて滅亡するの悲運に接せざるを得ず人生其物は倫理道徳を離れては一日も立ち得ざるが故に人生に於ける凡ての事件は又一として倫理道徳に反對して成立し得べきものにあらざ宗教に於ても亦然り宗教は勿論宗教として其が特種の本領を有するが故に全々此れを倫理の境界に制限することは本より不可能事なりと雖も少く共其は倫理の範圍と分離して立たず倫理の範圍を容れて立たざるべからず若し此れを思はずして宗教が道徳上罪惡と見らるゝ所をも敢て取り平然として省みざるが如きことあらば宗教は忽ちにして吾人が道徳意識の反抗を招き自家の存立を危うするに至る彼の羅馬舊教が其が絶対の權力を失墜するに至れるも明治初年に我が佛教が殆ど社會より彈劾せらるゝの運命に陥りたりしも歸する所はそが反道徳的態度を示せりしが故なりきされば將來の宗教は必ず倫理道徳を以て其が主要なる一内容となし常に道徳の進化に伴ひて推移發展することを忘るべからず。

第二に理想の宗教は合理的ならざるべからず合理的とは哲學或は科學等の一般

學術と調和し得ることなり、反面より言へば即ち迷信的ならざることなり、迷信は殆ど凡ての場合に於て國家社會に害を及ぼし引いては宗教其物を傷くるものなり、或は懶惰放逸にして然かも神に祈りて福を授けられんことを求め或は祭壇に於ける花挿の水を呑みて難病の治癒を期待し或は盜倫殺人を働きて猶神に媚びて罪の掩はれんことを希ふが如き此等は迷信の中最も有害なるものにして反道徳なると同時に又極めて不合理なるものなり、吾人は極力斯の如き宗教に於ける不合理的の分子を打破せざるべからず、而して此くすることはやがて宗教をして一般學術と調和せしむる所以に外ならず、固より宗教は哲學科學等とは大に其趣きを異にし宇宙の絶對者即ち神に對する態度に於ても前者は後者の如く知識的間接的思索的に非ずして、感情的直覺的、信仰的なるが故にそは一々論證的、説明的なる能はず、又論證的、説明的たるを要せず、然れ共其の言ふ所は學術と矛盾し、或は反對するものたるべからず、否充分にそを包攝し得るものたるを要するなり、元來合理的要求は人性の本然に基くものにして如何に此れを斥けんとするもつひに得べからず、されば吾人は超理的のことは此れを信じ得べきも反理的のことは假例

へば二に二を加へて八となるといふが如きことは如何に此れを信ぜんと勉むるも決して信ずること能はざるなり、彼のテルトリアンが「不條理なるが故に我れ信ず」と言ひたるが如きは寧ろ宗教家の陥り易き弊を自白せるものといふべし、アンセルムは曰く「知識の伴ふ信仰は單純なる信仰に優ると、洵に然り、たゞ一片の感情に過ぎざる信仰は幻の如くに消え易しと雖も確固たる道理に伴へる信仰は其内容甚だ堅實にして動ずることなし、此れを要するに將來の宗教は學術と手を携へて進むべく斷じて此れと矛盾衝突するは不可なり。」
第三に理想の宗教は非社會的なるべからず、吾人惟ふに宗教と雖も固より社會的生活を營む人類の精神的產物なるが故にそは社會を忘れ社會に背きて立ち得べきものにあらざり又立つべきものにも非ず、然るに宗教は一方に於て超自然的及び超現世のことを説くよりして動もすれば非社會的に流れて一般俗世のこととを卑しめ輕ずるの弊に陥り易し、假例へば家庭的生活を卑しめ政治的生涯を疎んじ實業的活動を蔑みし又は教育を嘲り文藝を侮り兵事を謗るといふが如き往々に於て偏狹固陋なる宗教家の間に於て見る所なるが此は甚だ誤まれることなり。

余は決して宗教をして世間に阿附し俗事に追従せしめよといふには非ず、宗教は
 飽く迄宗教として俗世塵事の外に立たしむるを要す、されど全々此等と無交渉の
 位置に立ち或は此等を蔑視し敵視するが如きは断じて不可なり、人生は宗教の爲
 に存するものにあらざり却つて宗教は人生の爲に存するものなるが故に人生百般
 のことを忘れて社會其物の成立ちと背馳する宗教は到底健全なるものといふ能
 はず、宗教の效果は人々が奮つて日々の業務を果すべき活力と希望と安慰と光明
 とを人に與ふるところにあり、されば徒らに隔世のことを説きて社會人事に冷淡
 なる清談者流や夢想家を作るは決して進歩せる宗教の本旨にはあらざるなり。
 此れを要するに理想の宗教は第一に倫理的たるべく第二に合理的たるべく第三
 に非社會的たるべからざといふにあり、此理想に反せる宗教を余は邪教と信ず、此
 理想に合せる宗教を正教と信ず、故に今後は宗教をして此理想に合せしむる様向
 上發展を圖らずして可ならんや、換言すれば目下の宗教をして此理想に合せしむ
 る様大革命をなさん事を望んで止まざるなり。

催眠宗教論終

明治四十二年八月十五日印刷
 明治四十二年八月二十日發行

催眠宗教論

定價金四拾錢

不許複製

東京市芝區愛宕町一丁目二番地
 大日本催眠術協會出版部

發行所

博 士 書 院

大賣捌所

東京市日本橋區日本橋一丁目三番地 大洋堂
 東京市神田區大塚二丁目三番地 東京堂
 東京市神田區大塚三丁目三番地 杉本書店
 東京市神田區大塚四丁目三番地 文光堂
 東京市神田區大塚五丁目三番地 東海堂
 東京市神田區大塚六丁目三番地 三松堂
 東京市神田區大塚七丁目三番地 上田屋
 東京市神田區大塚八丁目三番地 勉強堂
 東京市神田區大塚九丁目三番地 東洋印刷株式會社

博士書院發賣廣告

催眠術家必携

催眠凝視球

(定價 送料共 六拾錢)

抑々醫師が患者に接するに聴診器の必要ある如く、催眠術家は被術者に接するに催眠凝視球を持たざるべからず。然るに完全なる催眠凝視球なきは催眠術を行はんと欲する者の常に遺憾に堪へざる所なり。本會愛に感あり、製作費用を惜まらずして苦心したる結果此球を製出するに至れり。此球の特色を一二擧ぐれば左の如し、
 一此球を用ゆれば感受するに容易に催眠せしめ得る。且催眠の程度を自在に深く進ましむること。
 一此球は特に催眠術専用の具にして、美麗高尚なるを以て患者が醫師の信仰を確診器に對する觀念の如く、被術者が施術者の催眠凝視球に接すれば信仰心を高め治癒上の効果著しきこと。
 一此球は金屬製なるを以て壞れる子孫に傳ふるを得る虞なく、一個需むれば遠く使用法説明書を附しあ

催眠凝視球

(再製出來)

一何人直に使用し得ること、
 一以上の如き特點あり、よりに今般數個を製出して一個金六拾錢(送料共)にて希望者に分譲す。品切後は次回の製出期まで久しく需めに應ずること能はざるにより、希望者は此際至急申込されば品切れとなるべし。

▲催眠術家必携▲

東京芝區愛宕町一丁目 博士書院 電話新橋二八三番 電話替貯金口座一五七三番

博士書院新刊廣告

古屋鐵石著

近刊

催眠術上宗教の奇蹟

定價郵稅共 金四拾四錢

左記の各宗にては如何に可驚大奇蹟を行ひたるか。

基督教、クリスチヤン、サイエンス、佛教(釋迦、觀音、佛教の各宗、禪宗、日蓮宗、眞言宗、眞宗、修驗道、天臺宗、淨土宗等)神道(天理教、黑住教、禊教、陰陽道)金光教、蓮門教、其他。

右各宗にて行ひたる奇蹟の顛末を詳述し、其れを一々科學的に評論し催眠術にて容易に行ひ得る所以を論ぜり。宗教上の大奇蹟同様の不思議を自から實行して見むと欲する者は是非本書を一讀又再讀せよ。

博士書院新刊廣告

古屋鐵石著

(近刊)

家庭禁厭術

定價郵稅共
金四拾四錢

迷信の利用に非ず、學理の應用にて自己又は他人の惡癖及び病氣を「まじない」にて治す、奇法を詳述せり、無病長久家庭和樂、小遣錢取を望む者は是非一本を具へよ。

新刊 催眠術繪葉書

三枚一組金拾五錢
郵送料金貳錢

大日本催眠術協會にて會長や研究生相集りて實驗せる處を寫眞版と爲したるものにて鮮明美麗なり。

博士書院新刊廣告

博士學士大家論集

不思議の研究

菊大版壹百拾貳頁
寫眞版挿入
價郵稅共金四拾四錢

催眠術研究上關係ある趣味深き不思議の問題につき、現代に名高き文學、理學、工學、法學、農學、醫學等の諸博士參拾名、及び學士大家拾數名が、多年研究の結果を公にしたる處の珍說奇文を錄せり、實に本書は精神上に關する研究材料を藏せる寶庫なり、一度び其庫の鑰を開かば材料多方面に渡りて無盡藏なるに驚かるるならむ。

昨年より引き續き催眠術雜誌を購設せられし御方に限り定價の半額とす

催眠術新報增刊
催眠術博覽會
大日本催眠術協會
會員の催眠術實驗集

(目次大要)◎中風症根治法◎癱瘓實斯全治法◎頭痛全治法◎麻痺全治法◎足痛即治法◎癱小根根治法◎逆上根治法◎心悸元進法◎無催眠治療法◎發狂根治法◎心臟病根治法◎精神病根治法◎胃病全治法◎便秘即治法◎生殖器病全治法◎癩癬全治法◎血の道即治法◎蛇、蛙、雀、龜、兔、狗催眠法◎催眠應用無線電信法◎睡眠を催眠に移す法◎問答催眠法◎居ながら遠方の状況を識る法◎談話催眠法◎死者に面會せしむる法◎田舎に居て東京見物なす法◎戰爭上催眠術の價值◎地方に居ながら本會の催眠術治療を受ける法◎外數件

▲洋裝全一冊 價郵稅共貳拾錢▼

催眠術新報增刊
愛妻
神經衰弱者の福音

(目次大要)◎神經衰弱必治法◎素人座禪法◎惡癖(手淫)矯正術◎青森縣に於ける催眠術上刑事裁判例◎吃音矯正術◎天下無敵人心操縱法◎男女自活の早道◎諸博士立合にて遠方の人を催眠せしめし實驗◎冒險的大魔術◎二十八ヶ月間の睡眠◎外數件

▲洋裝全一冊 價郵稅共貳拾錢▼

禪學研究會著
獨習
自在
座禪之奧義
一名實踐的禪學

本書に基き研究せば素人にて座禪を行ふを得、妄念を拂ひ健康を増し、徳性を滋養し、膽力を養成し悲觀を樂觀とし、處世の秘決を悟る等の利あり、實に座禪は佛教の眞體を味はんとする者のみならず、精神の修養として萬人の心得可きものなり。

▲洋裝全一冊 價郵稅共四拾錢▼

新案
記憶力増進法講義
大日本記憶學會著

本書は海外の學者より大喝采を博せし高著にして、本書の偽版を海外に輸出したる外國人あり、發覺して東京地方裁判所を煩したる大珍事を惹き起したるは本書也、以て本書の眞價如何を知り記憶力の増進を望む者は是非一讀せよ。

▲洋裝菊判全四冊 價郵稅共金八拾六錢▼

醫科大學志賀先生著
催眠診斷學
一名簡易診斷學

凡そ治療が效を奏するか否やは診斷の適否によりて決す、然るに催眠術治療をせんとする者にして此素養毫もなければ治療するの實力なしと云ふ可きなり、本書は此弊を矯めんが爲めに醫學の素養なき者にも解し得るやう説述せり。

▲洋裝美本 價郵稅共五拾錢▼

古屋鐵石述
催眠法律論
一名催眠犯罪論

(記載要旨)◎不承諾者を催眠せしめし術者の責任◎犯罪を豫期して催眠状態となり罪を犯せし者の責任◎一婦人催眠感勢にて騎兵を殺したる裁判事件◎催眠感勢にて人を射殺し無罪となりし裁判例◎催眠應用殴打創傷罪、強姦殺人罪、誘拐罪、詐偽取財罪、贓物罪、浮浪罪、犯罪自白等の事實論◎催眠術は犯罪を犯すに便利なる者なるか、品性修養法其他。

▲催眠術新報增刊 價郵稅共金貳拾六錢▼

煩悶消失
快樂增進法
古屋雨宮兩學士著

科學を經として哲學を緯とし、生活難、不可解、失敗、病苦、慚愧、色慾及び不和等の爲め煩悶懊惱の極自殺せんとする者をして其煩悶を悉く消失せしめ、日夜歡天喜地、業務に専心ならしむる妙法研究の好資料、尙本題に干する五大文學博士の高論を併載せり。

▲催眠術新報臨時増刊 價郵稅共金叁拾錢▼

腦及神經健全法と
記憶力增進術
大日本記憶學會著

腦及び神經の衰弱を治し、記憶力を絶對無限に増進せしめ、如何に詰めて勉學するも腦の疲勞、記憶の缺乏を知らしめず、劣等の學生をして優等生とならしむる方法を研究する好資料也。

▲洋裝美本菊大判一百頁 價郵稅共金四十六錢▼

醫科大學志賀先生著
西洋獨按摩術
一名マッサージ自療法

本書を讀んで研究し之を我身に應用すれば肩張、頭痛、疲勞、胃痛等は即座に忘るべし、又「マッサージ治療所」を開き、難病者を救ひ人助けをなし、己れも又一大金儲を爲すを得べし、又催眠術治療に之を應用して容易に深き催眠に誘導し或は言語の暗示のみにては效なき患者に、之を應用して奇功を奏することを得ん。

▲催眠術新報増刊 價郵稅共金貳拾錢▼

古屋鐵石著
催眠術治療法
一名催眠術自宅療法

醫藥にて治療の道なき自己又は他人の重病惡癆を催眠にて治療し得る催眠治療の奧義を詳述せり、何人にとりても此書に基き研究せば直に實行するを得、奏效は確實、無害安全なり、附録には「催眠術教育法」「新療法オステオパシー」不承諾者催眠論」を掲載せり、眞に家庭の寶典也。催眠術教科書中の一部を單行冊とせしむ。

▲洋裝全一冊菊大判一百頁、定價郵稅共四十六錢▼

上野柳眠著
催眠心理學
花澤文學士、竹内楠三先生
桑原俊郎先生の眞筆挿入

催眠心理學を知らずして催眠術を人に施さんとするは、恰も爆烈彈の使用法を知らずして之を弄ぶに異らざるか、若し本書を繙かば催眠術安全の方法を悟ると共に斯術の蘊奧を知得し、從來の實驗上何故に催眠の深淺が意の儘にならざりしか、重患惡癆は何故に忽然消失せざりしか其理由躍如として胸中に浮ばん、眞に本書は催眠術に志ある者の一讀すべき良書也。

▲洋裝全一冊菊大判一百頁、定價郵稅共四十六錢▼

男女無錢
東京遊學之秘訣
兩宮學士著

男子志を立て一文無しにて郷關を出で、學を修め名を擧げんと欲する者は必ず讀め、實行は簡易なる成功の道を示せり、實に本書は苦學海の羅針盤なり。

▲催眠術新報臨時増刊、定價郵稅共貳拾貳錢▼

告廣版出院書士博

文序生先了圓上井士博學文
文序生先了圓上井士博學文
閣校生先人復內堀屋古

術魔大的神驚

錢四拾六金共郵價*頁四十七百一判大菊

- 緒言 魔術とは何ぞや●不可思議と不可知●魔術の定義●物質的魔術●精神的魔術●不思議の現象と魔術の關係●過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 米國狐狗狸術(フランセット) 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 日本狐狗狸術(スピリチズム) 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 禁厭術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 見神術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 幽靈對話術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 眞言秘密術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 精神感傳術(テレパシー) 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 天眼通術(クレボヤンス) 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 火渡術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 狐道術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 讀心術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 骨相術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 忍術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 仙術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 幻術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 氣合術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 棒寄術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 火箸曲術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 武道竹折術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 男女交際的魔術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律
- 地獄極樂漫遊術 過去現在未來の魔術●魔術の歴史●魔術の分類●魔術の目的●魔術の材料●魔術の儀式●魔術の成功●魔術の失敗●魔術の危険●魔術の利益●魔術の害●魔術の未來●魔術の地位●魔術の社會●魔術の政治●魔術の宗教●魔術の藝術●魔術の科學●魔術の哲學●魔術の倫理●魔術の法律

(秘密圖七)

告廣版出院書士博

大日本催眠術協會講師古屋鐵石述

催眠術獨稽古

附動物催眠法

本書は多年間催眠術の通成に基き、催眠の奧義を獨りにて稽古せらるる、様最も簡易
信教授をなし會員をして、催眠の奧義を獨りにて稽古せらるる、様最も簡易
本意に基き研究せ、自在に行ひ奇々妙々の現象を呈せしむることを得、催眠術家之れを一
悉く意の儘ならしむるを得る、保證する所也。實に本書は日本第一の良書なり。

目次大要

● 催眠術とは何ぞや●催眠術の沿革●催眠術の起原●動物磁氣說●神經學的說●暗示說●第二自
● 催眠術の分類●催眠術の目的●催眠術の材料●催眠術の儀式●催眠術の成功●催眠術の失敗●催眠術の危険●催眠術の利益●催眠術の害●催眠術の未來●催眠術の地位●催眠術の社會●催眠術の政治●催眠術の宗教●催眠術の藝術●催眠術の科學●催眠術の哲學●催眠術の倫理●催眠術の法律

附動物催眠法

附催眠術實驗錄數十件

博 士 書 院 發 賣 目 録

●男女身の上豫言不思議に當る●

プ ラ ン セ ッ ト

(一名米國の狐狗狸)

…定價金壹圓拾錢、郵送料内地金拾貳錢…
臺灣、清國參拾錢…

本具は一種の玩具に過ぎざるも、催眠
心理學上の實驗具、家庭娛樂の滑稽具
として米國の家庭にては必ず一個を具
ふると云ふ、依て本院にては米國より
原物を取り寄せ、原物に違はぬ様模造
し同好の士に分ちたるに、幾何もなく
して面白き結果を得たりとの報告續々
あり、本院實驗用として製造せしもの
餘分あり、何人にも直に使用し得らる
る様使用法を附して希望者に分譲す。

▲(近來不完全の偽物を買ふ者あり注意を乞ふ)
▲言ふに云はれぬ面白味あるプランセット▼

古 屋 鐵 石 著 價 郵 稅 共
四 拾 四 錢

獨 習 自 己 催 眠

催眠術を知らぬ者でも此書に基き實踐せば、自己
で自己を催眠せしめ**自己の病癖を治す**

ことを得、主効は、
神經衰弱、腦病、吃音、記憶減弱、神經
病、不眠症、寢小便、船車暈、眼病、胃
腸病、泌尿生殖器病、其他藥にて治せ
ざる病氣
なり、彼の降神術、見神術の現象も自己催眠によ
りて起すを得、實に自己催眠は**煩悶を拂ひ**
精神を修養し無病長壽を圖るの
良法なり。

大日本催眠術協會出版部
東京市芝區 博 士 書 院
愛宕町一の二

振替貯金口座 一五七一三番
電話新橋 二八三四番

260
316



03